俄羅斯紀聞

早稲田大學附屬
圖書館
寄第 川田氏寄贈
第
第
出帶許不外館
ル8
2994
7

俄羅斯紀聞

第七冊

魯西亞本紀畧

門 ル 87
3038
7
巻
ル 8
2994
7
特

魯西亜本紀畧 草稿巻之一

ヤヘワト

吾

邦

神武天皇ノ御宇ヨリ前二千二百三十三年ニ當テ遠西ノ國ニ諾危氏真人出ツ後世地父ト称ス其壽九百五十歳ト云其長子ヲヤヘワトト云第八ノ子ヲロウス氏其治ル國ヲロワセ又ルワシヤトモ云和蘭ルエスランド氏

按スルニ地理ノ書ニ吾

稱德天皇ノ御宇遠西スラホニヤノ意太利亜ノ北西ニアル國名主ニ

三年アリ其季子フルフシユスト云又ヤ
ヘルトノ子ニメセコ伝アリ（是説ナリ然レトモ最先ノ詳ナルニ如ス）其次第ヲ記サス其居ル地ヲ名テモ
クワニ又モスコウニ云後世此處ニ都ス因テ總國ノ名ヲ
称シテ莫思箇未亜ト云
是ヨリ後　ノ間此國ニ主タルモノ寥々トシテ傳ルヿ
ヲ闕ク但シ中古ニ及テロリキナル者アリテ其国ニ主タリ故ニ
コレヲ以テ大祖トスルナリ
補ロ同　第一世
ロリキ
吾
孝謙天皇ノ御宇彼ノ国ニ群雄各一方ニ割據ニテ時々闘爭
シテ平和スルヿナシ然ルニ古来高貴ナル者ノ苗裔ニ三人ノ
兄弟アリ長ヲロリキト名ク（ノホコロトヲ治ム其居城ヲラツテ
ガニ在リ邑ハウフルカノ河邉ニ在テノホコロトヨリ七十二
里ナリ（日本里法三十六町ヲ以テスルト下皆コレニ倣フ）次ヲシナムスト伝白海ノ数州ヲ治ス
居城ハ州毎ニ在リテ時々移リ居ス季ハトロイラルト伝フレスコ
ヒヲ治ム居城ハスラルヨリニ在テ皆俊傑英雄ニシテ政治軍
旅ノ事群雄ニ抜出シテ他復ユレヲ犯スヿ能ハス乃漸次ニシ
テ成クコレヲ帰服セリ時ニ
勝宝六甲午ノ年ナリ此三人共和シテ總魯西亜ヲ有チタリ
二弟先立テ没シテ終ロリキ一統ニシテ主トナル

寶字七癸卯ノ年ナリ
後幾モナリシテ主病ヒス其子幼ナルヲ以テ其族カレクナル
者コレヲ輔テ國ヲ嗣シム

第二世
イ[illegible]ル

成長ノ後尼勒西亜ヨリ其疆彊ヲ侵スオレヒト共ニ軍ヲ
發シテ防戰シコレヲ逐テコンスタンシノッホレニ到テ還ル
ヲオヒヲ居城トス
フレスコウヒニ女主オルヒ一ニオラト称スナル者アリ
主コレヲ入テ室トス
尼勒西亜ノ軍再ヒ侵シテ彊ニ入ル主又自ラ軍ヲ率シテ
是ヲ逐ヒ三コメディレニ陳ヲ布キ出テデリウリヤンノ軍ト
戰テ彼ノ地ニ亡ス

第三世 后妃
其子幼ナルヲ以テ其室オルガ主トナル
オルガ
主專ラ先主ノ仇ヲ報セントヲ図テ大ニ軍ヲ催スデリ
ウリヤニノ主コレヲ恐レテ金帛ヲ以テ和ヲ請フ女主コレ
ヲ敢テ受ケスシテ軍ヲ発シテ敵地ノ彊ニ陳営ヲ構フ
敵仍リニ贈遺ヲ用テ罪ヲ謝セントヲ謀ル女主稍軍勢
ヲ強クシ且コレニ善待シテ聊モ又兵ヲ動スヿナシ敵益賄
賂ヲ用テ平和ヲ請ヒ且婚媾ヲ結ハントヲ図ル即兵士二十

人ヲ贈テ贖物トス女主大ニ奮怒シテ即時ニ其兵士ヲ
斬シメ此ノ如キハ吾望ム所ニ當ラストシテ尚餘物ヲ出シテ
ヲ責ム敵再ヒ上士五十人ヲ贈ル又當ラストシテ亦コレ
ヲ斬シメ亟ニ贖物ヲ責テ退カス然留居スルヿ周年ナラン
トス一時女主命シテ糧食ニ充シカ為ナリト言テ敵ノ城邑ニ
鴿ヲ買ハシム即毎家ニ頭ノ活鴿ヲ募テユヒヲ得タリ茲ニ
於テ毎鴿炮火ノ球ヲ繫テコレヲ放フ忽城邑一齊ニ火ヲ
発スカコレニ乗シテ火攻ヲ以テ城ヲ破リ敵ヲ討テ仇ヲ
報スルヿヲ得タリ剩ヘ其地ヲ略シテ終ニ凱陳シテ還ル
後年月ヲ経テ尼勒西亜ト和平ス

主嘗テ尼勒西亜ノ法教ヲ仰望ス因テ使ヲ通シテ其
法ヲ受ク乃チコレヲ信スルヿ甚シ遂ニ自駕ヲ発メ彼國ニ
往タル其行装尤厳ナリ彼ノ「ケイセル」帝ト言ヘカコトシ「ショハン」子スニ相見
テ道号ヲ授リテ「ペピ十」氏乃進待ノ男女コトゴトク門ニ入ラ
シム尓後「オウ」ニ還ル是魯西亜ニテ此教ヲ奉スル
ノ始トス故ニ後世此主ヲ尊テ「ペピ」ト称ス是
魯西亜ノ言ヘ昏コレヲ訳シテ「ツン子ベエル」ト云即「ツン」ハ日ナリ
子ハ轉音ナリ「ベエル」上ハ形容ナリ即日象ノ義ヲ
以テス以謂其盛德ノ万世不易ナルヿ日ノ光輝ノ天
下明カナルカ如シテトナリ時吾

村上天皇天暦六壬子ノ年十月

子スワチスラウス　成長シテ国政ヲオサムヘキニ至

テ女主病ム時ニ吾

圓融天皇天禄三壬申ノ年十月

第四世

○スワチスラウス

都ヲエロスラウニ遷ス是国ノ中上ナルヲ以テナリ

ノホゴロトノ州官ノ女ニルスカヲ室トス三子ヲ生ス

長ヲエロボリスクト云　中オウヲ領セシム次ヲオレガ

ト云デリウリヤンヲ領セシム季ヲヲロドシルトス

ホゴロドヲ領セシム主素ヨリ尼勒西亜ノ法教ヲ信セ

ス今土地ノ故ヲ以テ軍ヲ発シテ彼ニ人ノケイセルル

ハシリウストコンスタンシノストヲ攻ム遂ニ戦勝

テ多ク彼国ノ要害ノ地ヲ得タリ然ルニ其地ニツレ

ミコルノ主クリスト云者賊ヲメ密ニ営中ニ入レテ主

ヲ討シムクリスト主ノ首ヲ得テ其頭蓋ヲ用テ酒盃ニ

造ラシメ乃チコレニ銘ヲ刻ス其語ヲ譯テ茲ニ附ス

死

強求新奇自得亮焉

長子コレヲ嗣ク

第五世

○エロホリクス

大臣某主謀シテ次子オレカヲ逐テ遠地ニ適セシム

遂大河長橋ノ大臣謀テオレカヲ橋上ヨリ墮シテ溺死セシム　季子ヲロトミル難我ニ及ハンヿヲ恐レテ領地ヲ棄テワレスコエモリニ奔テコレヲ避ク主二弟ノ地ヲ收テ總魯西亜ヲ有ノ時ニヲロトミルノ臣某謀ヲ用テ都下ニ到リ陽ニ罪ヲ謝シ和ヲ請ヒ陰カニ二人リカ士ヲメ竊ニ宮ニ入レテ主ヲ弑サシム　ヲロトミル　ノホコロド　ニ還リ遂ニ總魯西亜ニ主タリ

第六世

ヲロトミル

主國ヲ有ツノ後漸ク奢侵淫逸ニシテ專遊宴ヲ事トセリ其膚妾八百人アリトス然性威猛ニシテ只其屬州コレヲ畏敬スルノミニアラス近隣州国ノ主タル者又殆ト恐服スルニ至ル

危勒西亜ト和平シテ彼主ト相親ム是主淫教ヲ信スルヲ以テノ故也其族某ノ妹アンナヲ以テ危勒西亜ノケイセルコンスタンシウスノ子ポルヘイロケニトスニ嫁セシム

主亦彼姉ヲ請テ室トス吾

一條帝長保二庚子ノ年　彼主危勒西亜ノ淫教ヲ受テ其号ヲバジリウスト称ス其弘法ノ道士ノ徒多ノ魯西亜ニ来リ留居スルヿ久シ国中コレヲ化スル者甚多シ都テ魯西亜ニ危勒西亜両國相親睦スルヿ

年久シ

吾

寛弘五戊申ノ年　主病ム

此主厄勒西亜ノ教法ヲ国中ニ弘ムルノ始トス故ニ後世コレヲ尊テ彼七月十五日ヲ以テコレヲ祭ルヿ永ク

主十二子アリ各既ニ一州ヲ分テ領セシム主没後断相爭テ時ニ戦鬪シテ平均セス[ホ]ロツク州主再十子ノ一ナリ

ヤロスラウナル者吾

三條帝長和四乙卯ノ年諸州ヲ併テ魯西亜ヲ一統シテ

第七世

コレヲ治ム

ヤロスラウ

主ヰ[オ]ウノ城邑ヲ修飾シ並ニ寺観法堂ヲ建ツ吾

後朱雀帝長暦元丁丑ノ年ノ前ナリ　主没ス五子アリ既ニ諸州ヲ分領ス乃其国後分裂シ互相爭テ戦鬪止ムヿナシ五子ノ内[ウ]セヲルチエ[ス]ナル者[ヘ]レスラウヲ領ス其子ヲ[ロ]ドミルト各ク此漸権勢ヲ得テ分散シタル諸族分コレニ帰シ諸州ヲ征シテ[ス]モレンスヒヰオウ[ヲ]ロチミル[ヲ]佐ヒ再ヒ魯西亜ヲ一統ス

第八世　世紀ヲ案スルニ中ニ衰亂シテ復興シタリトアレバ此ノ事ハ疑ヒナキニアラズ

○ヲロトミルテテウ王エテ

此主モナルクロ」ト云尊号ヲ称ス即總魯西亜ヲ平治ス

ル美ナリ時ニ軍ヲ発シテ翁加里亜ノ主ケイサト戰

フ吾

崇德帝天治二乙巳年ニ主汲ス子ウセヲルドコレヲ

嗣ク

第九世

○ウセヲルト

主七子アリ各諸州ヲ分領ス主汲メ後又各相爭フ

又西韃靼「即欧羅巴ニ近キメッタンヲ云」数ニヨレヲ

侵シテ内外甚タ安カラス且諸軍官各威權ヲ振ヒ

勢ニ乘シテ州郡ヲ私ニ領シ相互ニ又爭鬪スルモノ

アリ

世間ノ衰亂無主ノ数十百年モアルベシ

四條帝嘉禎二己卯ヶ年「セオルジウス」セオルシオ

ウヲス」主トナル

崇德三帝天治二年乙巳ヨリ四條帝嘉禎二年己卯ニ至テ百二年

第十世

ゼオルジウス

セオルシオウイス

ウセヲルト

~~ウセヲルト~~

第十世

○嘉禎三庚辰ノ年

セオルジウスデメトリオウイス

主ハ「ウセヲルト」ノ姪ナリ

夫魯西亜頃年ノ間兄弟叔姪交爭戰シ相殺傷スル者

アリ既ニ東ノ方西韃ノ力ニ困ラレ今又西ノ方礼勿(リホ)泥亜ヨリコレヲ侵伐ス或ハ地ヲ割テ西韃(ニア)靼麾下ニ属スルモノ凡ソ二百四十餘年ノ間内親族相闘ヒ外隣国

第十二世 亟リニ侵シテ安處スルノ時幾モナシ

○ヤロスラウデ テウエエテ

主ハゼオルジウス」ノ第ナリ即其兄ニ嗣テ主トナル

礼勿泥亜ノ主ヘルマンハロクノ」魯西亜ヲ伐テモ大クノ」ニ入ル主此戦ニ死ス ハロクブレスコウヲ取ル時ニ吾

延應元己亥ノ年ナリ 主ノ子 ノホゴロドノ主

第十三世 アレキサンテル

○アレキサンテル

後嵯峨帝寛元元癸卯ノ年主不意ニ軍ヲ率テ ブレスコウヲ伐テ彼カ侵ス所ノ地ヲ再ヒ収ム

第十四世

○ダニイルロマノウイス

ヨロトミルデ テウエエデノ子ナリ即前ヤロスラウ」ノ子ウセヲルト」ノ遺系ヨリ出ダリ

寛元三乙巳ノ年 コホンキ」国制ノ主ノ如キヲ立ノ爵ヲ受テ西タツタンノ邊疆ヲ侵シテ国安カラス

第十五世

○ダニイルアレキサンドロウイス

「ペロスラウデ」テ「ウェエデ」ノ子ナリ嘗テノホコロトシ

後伏見帝　正安二庚子年　日「ノウィス」ニ祠テモスリ

「九」遷ル建時ヨリ魯西亜ノ君主ノ本系ヨリ出ル者ヲ

「モスコビテルス」ト称ス

後三條帝　乾元元壬寅年　隣国ト大戰フ

初ハ波羅尼亜ノ主「ウェ子スラウス」次ハ里都亜尼

亜ノ主「ゼゲミン」又波羅尼亜ノ郡主カシミル」ナル者魯

西亜ノ屬州「ベリイ」ノ内「ホル」「イニイン」ヲ侵シ取テ

兵勢ヲ振テ自波羅尼亜ノ州郡ヲ篡ヒ且黒魯西亜ノ

内「ウクライ」ニ「ホドリイン」キオウヲ取リ併テコレヲ

領シ始ント波羅尼亜ニ居タラントス

主始テ称シテ「ツ。ロ。オ。ト。ヘ。ル。ト。ゾ。」ト云フ「ロオト」ハ大ヲ

等爵ノ公ノ如シ　「ルドク」ハ五

即大公ノ義ナリ　五子アリ其長ゼオルジウスカリタ

レヲ嗣ノ

第十六世

○セオルシウスカリタ

第十七世其從兄「テメトリウスミカロウィス」主ヲ逐テモスクワ

ニ主タリ然ルモ後西韃ノ郡主「モスクワ」ニ侵シ入テ主ヲ

討テ首ヲ斷ル

第十八世

○ヨハンネスカリタ

先主ノ弟ナリ

西韃ノ軍都下ニ屯シテ退カス主竊ニ彼軍士ニ財帛ヲ與テコレヲ謀テ退キ去ラシム

主三子アリ　シメオン　ヨハンネス　アンドリウスト云シメオン　コレニ嗣ク

第十九世

○シメオン

子ナシ　次ノ弟コレニ嗣ク

第二十世

○ヨハンネス

子　デメトリウス　コレニ嗣ク

第二十一世

○デメトリウス

主西韃ノ為ニ数ニ困テル終ニ金帛ヲ以テ和ヲ請ヒ且コレニ臣タルカ如ク又然仍彼都主コレヲ侵スヲ以テ防戦フ久シテ止ニス西韃遂ニ ポロツク里都亜尼亜ヲ取ル

後圓融帝　永和三丁巳ノ年主西韃ノ為ニ敗ラレテモスクワヲ去テ一度ニ邊リ新城ヲ搆テ防戦ス歇ノ矢窓ヨリ入ル主コレニ中テ死ス

子七人アリ長ヲダニイル云先立テ没ス次子コレヲ嗣

第二十二世

○バジリウス

世民ニ韃ノ汗ヲ破殺シ韃人巻ノ逐レ去レトアリ

永徳元辛酉ノ年ニ国ニ主メリ

主常ニ軍旅ノ術ニ心ヲ用ヒ且国制ノ事ニ於テモ器利益スル所アリ但在世久シカラスシテ病ニ犯ス没後其室男子ヲ生ム親族其正胤ニ非サルヲ疑テ主ノ弟

第二十三世

○ゼオルゾ

ゼオルゾヲ立テヲレニ嗣シム

大臣室先主没後ノ子ハジリウスデウエエデヲ立ントスルヲ廃立ノ事ヲ會議ス時ニ主ノ昵近ノ小臣及軍將等先主ノ子ヲ逐フ主病ニ犯ス　大臣等先主ノ子ヲ迎テヲレニ嗣シム

第二十四世

○ハジリウスデウエエデ

先主ゼオルゾニ二子アリアンデレアス　デメトリウスト云成長ノ後彼諸臣主ヲ廃シテアンデレアスヲ立シテ欲ス然レトモ都下ニ兵ヲ動スヲ能ハサルヲ以テ偽テ商賈トナリ貨物ヲ積タル車ニ兵器ヲ匿シテモスリフニ入リ急ニ兵ヲ容シテ主ノ宮ニ乱入ス主防ク能ハスヲレヲ避ケテ寺觀ニ入兵士ヲレヲ捕テ眼ヲ穿チ出シ其空ト共ニウクリフスニ授ス先主ノ二子共ニ都ニ入ル主ノ諸臣悉ク相盟テ彼ノ二子ヲ逐シテヲレヲ會議ス二子ヲレヲ聞テ密ニ都

ヲ出テ難ヲ避リ乃諸臣主ヲ輔テ再ヒ都ニ入ル然ニ
眼昏瞽骨ニ因テ發モナリシテ病之大其子ヨハン子
スコレニ嗣ク
此主ノ正系後来ハ聖主ヘテルハ二傳ルナリ
主ノ子ヨハン子スト云ヨハン子スノ孫ハジリウスイ
ハノウイスト云イハノウイスノ子ヨハン子スハシリウ
ステテウエエデト云者ニ女アリシリヤト云シリヤ魯
西亞ノ高官ノ人ヘトルニコロウイスニ嫁テミカアル
第二十五世ドルウイスヲ生ス是人即聖主ノ祖父ナリ
○ヨハン子スバシリデス

主專ラ内ヲ治ルヿヲ務テ外征ヲ好マス且親族ヲ
正フシテ声色ヲ遠サケ和信ヲ以テ隣国ニ交リ權謀
以敵國ニ待ス
後土御門帝 文明九丁酉ノ年 千五百七十七年 ノボ
コロド」ニ對メ陳ヲ構フ此州前時里都亞尼亞」ノ乃ニ
奔ハル然ルニ尼勒西亞ノ沿教ノ長「テオヒリュス」ナル
者此州ニ在テ土人漸ク之コレヲ信スルモノ多シ魯西
亞素ヨリ此沿ヲ宗トス主尼コレヲ奉承スト已ニ軍ノ
兵シテヨリ七年ニ至テ土人悉ク此沿ニ入リ終ニ其
地ヲ併テ魯西亞ニ帰ス是一ハ則主ノ軍威ニ因リ一

八則「テオヒリコス」ノ教化ニ因ルナリ実ニ又ニ血又ラスメノ一州ヲ畧シテ其国ヲ完フスルヿヲ得タリ其時諺ニ誰カ鬼神ニ勝ン乎誰カノホコロドニ勝ン乎トヽ云リ

前時西韃入テ毛スリロヲ侵セルヨリ以来今ニ至テ彼ノ人留住スル者多シ然ルニ近時法教盛ンナルニ因テ彼ノ悉ク之レニ化スル主此流ヲ尊敬シテ宝刹寺観ヲ建ルニ及ンテ韃人居ヲ旧處ニ還ルニ至テ彼ノ地若ク魯西亜ニ属スト尚其近隣ノ韃人又此教ニ帰化シテ其地又魯西亜ニ併スル者多シ之レニ因

西韃ノカサンノ地ニ至ルヽテ多ク魯西亜ヲ仰望スルモノアリ

莫尓太未亜ノ主スヽテハノスカ云奇ナル哉ヨハン子スル静坐シテ眠ルカ如ク其国漸ク強大ナリ人毎ニ干戈ヲ動カス自常ニ疆城ヲ固スト

主始テ莫廟哥未亜ノ周邊ニ墻壁ヲ築シム

後柏原帝 永正二乙丑ノ年彼ナ一月病ヒ大人其徳ヲ称シテ「ツロッチン」ト名ク冥語ニナリ是魯西亜ノ言ニシテ即大ノ義ヲ以テスルナリ

其子先テ没ス其孫ヲ以テ嗣トス

第六冊ノ魯西亜世紀ヲ玉ヒ止リ

第二十六世

○シリウスイハノウイス

主隣交ヲ厚クシテ疆界ヲ堅固ニシテ豫メ外患ヲ防リ蠣島ノ主外イセル[illegible]ヲキシミリヤヌスト常ニ親睦ニシテ吾

永正十一甲戌ノ年　ケイセルノ位ヲ受テ其交ヲ結フ

十兄弟明友ノ如シ永ク子孫ニ至テ互ニ相爽テサル

ノ約ヲ盟フ

後奈良帝　天文二癸巳ノ年　主病ム　子コレヲ嗣

第二十七世

○ヨハンチスバシリウイスデテウエエテ

主性猛勇ニシテ戰ヲ好ミ且侵靡淫蕩暴虐殘害ナリ

常ニ鉄策ヲ持テ人ヲ指揮ス若一事意ニ適セサレハ輒コレヲ以テ擊ツ或ハ怒ニ乘シテエレヲ刺キリテ

レヲ劃キリ或ハ猛獸ニ爬キ裂カシム又戲ニ瞽者ヲ

橋上ヨリ墮シ婦女ヲ然ノ爪牙ニ傷テセ或ハ然ノ皮

ノ裏ニ入テコレヲ縫合シ豪犬ノ群ニ投シ其骨肉粉

碎セルヲ觀ルノ類ナリ

此條コレヲ讀ニ中心慘怛エレヲ抄スレハ筆硯ヲ

汚スカ如ク思フ者アリテコレヲ託述スルニ忍ヒ

ス故ニコレヲ畧ス

臺閣樓觀コレヲ飾ルニ金銀ヲ以テスル者遍シテ尖

趨ノ処ニ及フ其朝ニ臨ム時ニ冠履衣服希世ノ明玉ヲ綴シ右手ニ金策ヲ執リ（和蘭ニケブテルトスフ又レイキスクツフニ云）（即君主王者ノ持ツ所ノモノ也世主特ニ金ヲ以テコレヲ造リ）（ヤニヲ以テ飾トスルナリ）世言義訳シテ国珠左手ニ「イキスアツペル」ヲ持ツ トスヘシ其状未詳

斯ノ如キノ奢侵前代ノ君主ノ未アラサル所ナリ其美色ヲ撰ム二別ニ館ヲ設テ司ヲ置ク其制令又華麗ナリ今コレヲ畧ス

天文廿一（千五百八十四）壬子年　西韃ノ地カサンヲ伐テ従ハシム

同廿三（千五百八十六）甲寅ノ年　西韃ノ地アストラカンヲ伐テ従ハシム

其餘北高海邊ノ諸州ヲ従ヘ其金策ノ武威増ス盛ニシテ頗ル已尓（ビル）西亜（シベリア）ニ及ヘリ

按スルニ已尓西亜ハ北高海ノ南ニ在テ應帝要都尓格ノ間ニ夾タリトイヘトモ古来他邦ヨリ侵犯ヘカラサル特立堅固ノ国ナリ故ニ今コレヲ奉テ此主ノ武威ヲ称スルナルヘシ

又云　西韃ハ已ニ前代ヨハンチスハジリデスノ徳化ニ感服シタルノ地ナリ蓋コレヲ以テ此功ヲ成タルナルヘシ

主常ニ鬼神ニ媚ルヿ甚深シ故ニ人コレヲ謂テ鬼神ヲ
怖ル君ト称ス其稽顙スル毎ニ頭ヲ地ニ着テ額ヲ摺
ル故ニ大祭ノ後ハ其額ニ青瞳ヲ発スルヲ見ルト云
リ

其長子イハン性恭肅ナリ大臣主ニ奬テ政官ノ長ト
ス群下咸ク其徳ニ敬服ス主却テコレヲ忌ミ悪クム
一時怒ニ乗シテ鋭策ヲ以テ其額ヲ撃ツイハン忽絶
倒ス後五日ニシテ没ス主大ニ悔テ痛哭シテ病ヲ発
ス乃暴悪稍止ム其侍臣ヲ善待スルヿ親戚睦友ノ
如クス且コンスタンシノホルノ寺観七万七千銀
ヲ贈テ好事ヲ修セシメテ亡子ノ霊ヲ慰ス後病癒エ
哀傷漸ク解ニ至テ舊ニ依テ悪行ヲ為ス
後世此主ヲ謂テ[テイラン]ト号ス西洋此ノ如キ暴悪
君ヲ称スルノ言ナリ

千六百二
天正十二甲申ノ年　主悪瘡ヲ発メ汚穢悪臭其脳苦
ノ態異常ナリ遂ニ耐スシテ没ス年五十六
次子[テオドルス]已ニ政ニ與レリ然レトモ幼ヨリ
シテ愚昧ナリ少子[デメトリウス]僅ニ二歳ナルア
リ其傅コレヲ立ントス欲ス次子[テオドルス]ノ室ノ
第大廚官ノ長是ハ高官ナリ[ボリス][ギエ]デノ

第三世

○テオトルスイハノウイス

コレヲ敵セズ遂ニ次子コレヲ嗣ク

ボリス専ラ政ヲ執ル権勢甚ダシ勿邏尼亜ト相親テ

国事多ソコレト共和スルヲ如シ

「キリムセヌルタリヤ」ト魯西亜トノ界疆ニ長城ヲ築ク

支那北邊ノ長城ノ如シ

天正十三乙酉ノ年（千六百八十五）ボリス私ニ計テ先主ノ少子

「デメトリウス」ヲ其母ト共ニ「オグリツ」ニ遷スモ又

「クワ」ヨリ三十六里ナル處ナリ

（原書三百六十里ト云今地理ノ書ニヨツテコレヲ改ス）

同十五丁亥ノ年　亜細亜ノ地石斛利　魯西亜ニ皈ス

案スルニ此地古今其属国ノ多少異ナリ今ハ東ノ方

遠ク支那日本ノ北ヲ経テ亜墨利加大洲ノ海峡ニ至

レリ古ハ印度ノ北辺沙漠ノ北ニ及フ地ヲ号ス即茲

ニ云フ所ノ者コレ也今号スル地ニ較スレハ凡十分

ノ四ニ當レリ予曰稿ニ今ノ大地ナリト記セリ後ニ

地理ノ書ニ校考スレハ　正保元甲申ノ年ヨリ以来漸

次ニ亜墨利加ノ海峡ニ至ルニテ盡ク魯西亜ニ從ヒ

タリ

此地ノ人曾テ魯西亜ノ王化ヲ仰望スルヿ久シク其主
ヲ尊敬スルヿ鬼神ノ如クス然是時彼ノ地ノ強賊
群集シテ西韃ノ属国「トボルスキ」ノ大城ヲ侵シ破
リ国中ニ襲テ狼藉乱妨スル魯西亜ヨリ六百ノ軍
士ヲ出シテコレヲ征シテ賊徒コトゴトク敗亡ス茲ニ於
土人相斧テ魯西亜ニ帰ス終ニ其地ヲ畧スヿヲ得
タリ其説地理志ニ詳也

地理志ハ原書ニ倫ル所ノ者ヲ云ナリ

ボリス大位ニ登テヨリヿヲ図テ常ニ貴族ヲ遠ケ或ハ小罪
アル者ヲハ極刑ス主ノ室即ボリスカ姉童身ナルヲ知
テ事ニ乗シテコレヲ倒シ撲撻セシメテ其胎ヲ傷ル
又諜者ヲ遣デメトリウスノ乃人ヲ伺シム「デメトリウス」年八歳ナリ同年ノ友ト戯ルヲ見ル即雪ヲ以
テ人ニ像ルモノ二十各コレニ名ヲ命シテ是ボリス
是侍臣是政官ナリトス乃木枝ヲ以テ劔トシボリス
タル者ヲ刺シ餘ハ皆或首手足ヲ斬テ曰吾
カサアル帝ヲ云魯西亜ノ言ナリトナル時将ニ斯ノ如
クセントス諜者還テボリスニ報ス

天正十九辛卯ノ年（千六百十）ボリス私ニ「デメトリウス」ヲ殺
センカニ利客四人ヲ買テ彼ニ遣ル時ニ親戚コレヲ

知ル者アリテ竊ニ其母ニ告ク母乃別ノ少童ノ形容
相似タル者ヲ其室ニ置テコレニ代ラシム一説ニ云
刺客其ヲ害テ デメトリウスヲ捕テコレヲ弑シ其屍ヲ
焼テ其從者ヲ悉ク殺シテ後患ヲ除ト云
ポリス 尚後患ヲ恐レテ其瘞處ヲ発キ彼屍ヲ焼大
而其葬儀ノ衣服ナキヲ見テ涕泣シ後数日憂傷ノ
色アリ

慶長二丁酉ノ年（千六百十六） ポリス主ヲ欺テ毒ヲ食セシム主俄
ニ病ヲ発シテ起ツヘカラサルニ至ル其室子無キヲ
以竊ニ主謂テ国ヲポリスニ傳ントヲ庶幾スト云主
遂ク金策ヲ取ル者ニ与ントト時ニ親戚皆集ル主金
策ヲ以テ其妹夫ヘドロニキタロオニノウィスニ授ク
ロオニノウィス是ヲ辞シテ其アレキサンデルニ譲ル
アレキサンデル亦別人ニ譲ル彼亦別人ニ譲ル是ニ
於テ主金策ヲ席上ニ擲テ云ク欲スル者恣ニコレヲ
取レト乃ポリスコレヲ取ル主遂ニ死ス

第二十九世

○ポリスギュテノウ

其大厩ノ長コレヲ詞ク
主性狡猾横逆ニシテ時人其簒弑ヲ知ル者ナシ即位
ノ後其大官巨室我ニ逆フ者ハコレヲ黜ケ或ハ遠州

ニ遷シ我ニ須ヲ者ハ交リヲ深クシ或ハ婚ヲ結フ
其官首ノ會議ヲ怠略シ政刑悉自恣ニ大但イ其才
出納散聚ノ術ニ長レタリ
慶長六辛丑ノ年（千六百二十） 莫厠尚未亜大ニ飢饉ス主倉廩ヲ発
テ大ニ米銭ヲ施テ窮民ヲ救フ
主ノ妹夫ソスケイナル者罪アリテ邊州ニ謫セラル
其路次ニ在テ デメトリウス尚存生シテ遠ノ一
精舎ニ潜匿セルヿヲ聞ク即コレヲ主ニ告ク主乃国
中ニ令シテ大ニコレヲ求ム故ニデメトリウス一處ニ
留リテ能ハス彼世ニ稜リ居ルトイヘドモ其探索急ナ

以テ一道士キリスカウトロベヤ」ニ者ニ議リ共
ニ道士ノ状ヲ乃テ国界ヲ出テ 勿羅尼亜ニ匿ス
主邊疆ヲ固クシ内外ノ人ノ出入ヲ厳ニス
勿羅尼亜ノ主 ミギスミユンドス」デメトリウス」ヲ
見テコレヲ懇テ善遇ス即謂フ夫ボリス 正嫡ニ非
スシテ縱ニ主トナルコノ人ハ魯西亜先世ノ王ルフ
ナアムヲ称ス 王ルフナリ ロハ血族相續ヲ云
アムハ名ナリ是前代ノ主ニ是各アルヲ以テ云ヘリ
當ニ魯西亜ノ主カサアルト帝ヲ云ナルベシ吾コレ
ヲ助ントスルヲ乃其属州 センドミル ノ女ヘリナ」ヲ

以テコレニ妻スヘキヲ約スヤ是ニ於テ彼ノ州主ト
議ル州主四千餘ノ軍士ヲ每ヲ是ニ於テ デメトリ
ウス魯西亞ノ疆際ニ陳ノ布リ其近隣ノ諸郡彼レ魯
西亞ノ正系タルヲ聞テ乃コレニ加フルモノ多シ
デメトリウス軍ヲ出スニ及テ誓文ヲ作リ數ニコレ
ヲ誦ス
曰嗟正明ナル執事 天ヲ指テ云ナルヘシ 乃逕ニコレ
ヲ覽ヨ維予小子爰ニ大事ヲ舉ク若シ夫レ惡ヲ作シ
貪ヲ力ハ則チ千霹靂予ヲ擊ツヘシ 迺吾軍衆必
死ノ精血ヲ以テコレヲ灌キコレヲ潔メン若夫吾

力事ヲ起ラハ則吾正明ヲ祐ヨ云ヒ是ニ於テ莫厲
箇未亞ノ人其不意ナルヲ以テ大ニ周章ス
時ニモスクワニ彗星ヲ見ハシ或ハ双日双月赤氣
芽ノ天変アリ又材狼亟リニ悲吠ス人挙テ凶兆トシ
テ恐懼ス主斯ノ如キ災祥アレトモ深ク怪ムヿナシ但
軍事ヲ令スルノミナリ
慶長十七巳ノ年 デメトリウスカ軍ノホゴロト」ニ
入ル兵勢增加ル主彼ノ軍衆ニ一倍スル軍ヲ出シテ
コレヲ征セシム戰ヲ交ルヿ凡三月両軍各死傷大者
夥シ デメトリウス其多寡相敵セスシテ戰終剣

利アルヘカラサルヲ計テ密ニノホゾロドノ主ヘ
トロウイス ホスヘン」ニ通スボスヘン嘗テボリスヲ
疎スノ心服ノ士ヲシテ陰ニ謀ヲ屬シ陽ニ事ヲ託シ
テ モスクワニ使タラシム謀セモスクワニ留ル
ヿ数日主俄ニ病テ口鼻ヨリ血ヲ出シテ死スヱボス
ヘン謀セヲシテ毒ヲ以テ主ヲ弑スル者ナリ其子尚
幼ナリ 其室内臣ト議シテコレヲ嗣シム

第二十世

ヘドル ホリツソ ウイス

主幼ナルヲ以テ其母政ヲ輔ソ
ヴメドリウス モスクワノ南 テエラに縣ニ入ル

其地ノ軍官嘗テ デメトリウス」ヲ仰望スル諸將ト
相誓テ悉クコレニ皈服シ遂ニ軍ヲ引テ モスクワ
ニ乱入シ主并母ヲ捕テ皆殺テコレヲ弑ス 此主國
ニ當ル丁僅ニ半年ナリ
即時 デメトリウス 軍ヲ率テモスクワニ入ル都下ノ
人謂テ云天吾国ヲ棄スシテ君主ノ正統ヲ完フシテ
再都下ニ還ラシムル乎則吾倚賴皈服スルニ耐ヘサル
ヘシ但豈ノ其容止當人君タルヘリヤ否ヲ候ワヘシ
ト初メ都門ニ入ルニ其隊伍齊整トシテ デメトリウス」
ヲ威儀凜然タルヲ見ル但一陳ノ旋風起騎士歩卒列

次ヲ混シテ雜乱セリ後宮門ニ入ラントスル時デ
メトリウス」稍沈吟ノ色アリ即踟躕シテ進ミサルヲ見
ル警時ニシテ庭上地面ヲ発シテ宮室皆焼テ残破ス是
則ボリス常ニ妖術ノ士ヲ使フ今此災ヲナス者ハ
蓋術士設クル所十リ且デメトリウス」初メ旋風ノ変
ニ因テ漫リニボリス」ガ宮ニ入ルヿヲ安セス豫メ此
災有ランヿヲ知ルニ似タリ デメトリウス別殿
ヲ修シメテコレヲ主タリ

第三十一世

○デメトリウス

国人先朝ノ正系タルヲ以テ殊ニ愉悦スルトイヘ
ドモ主衛臣内官悉ク勿羅尼亜ニリ属セル者ヲ用テ先
朝ノ礼法弊制ニ則ラズシテ卒尔トシテ大位ニ登ル
是ニ於テ國人大ニ望ヲ失フ
主食膳ノ儀歌唱ノ調皆野鄙村俗人常ニコレヲ賤ト
ス人前主ボリスカ女アキシニヤミ淫シ後コレヲ尼寺
ニ栖シム人大ニ是ヲ疎ス
又時ニ草騎ニシテ都邑寺観郊野ヲ微行シ弓矢馬銃
ヲ帯テ必猟ス毎ニ前後後駕ヲ供スルヿヲ敢セス
又都尔格ノ馬三匹皆駿足ナリ是嘗テ愛スル所ノ者
ナリ今別ニ内厩ヲ設テコレヲ飼フコレヲ三駿ト称

又内臣三百人皆異邦ノ人ニシテ偉傑豪強是其心腹股肱ナル者也悉ク天鵞絨ノ紅衣ヲ被シメテ吾国人トコレヲ分ツ

又先主ノ為ニ黜ラレタル者ヲ多ク挙用スソスケイ」カ如キ遠謫セラレタル者嘗今ニ及テ秩禄原ノ如シ然レ𪜈皆外官具テ内ニ入テ見ルヿヲ許サス但ソスケイ」ハ素ヨリ穀財出納ノ職ニシテ今尚外官ニ在リト雖モ陰ニ大志アルヲ以テ陽ニ主ニ阿曲シテ毎事其事其好ニ投センヿヲ欲ス

千六百二十五

康熙十一丙午年　コサツケンノ人「西韃ノ西勿羅尼ノ属国ナリ」少カサアルヤ帝ピイテル」年七十ナル者ヲ立テ四千軍ヲ起シテカサンアストラカンノ間ウヲルガノ河邊許多ノ地ヲ侵シ伐テ来テモスコヒリニ近ツク即先生テオドルノ遺子ナルヲボリスノ他ノ女子ヲ以テコレニ代ヘ密ニ匿シオキタル者ナリト称セリ然レ𪜈其明證スル所ナキヲ以テ速カニコレヲ征テ即時悉ク敗北シタリ

勿羅尼亜ノ主センドミルノ主ノ女マリナヲ養テ吾女トシテ主ニ妻ス今センドミルノ主数千騎ノ甲士

ヲ卒ヒ及ヒ勿羅尼亜ノ貴族コレヲ守護シテモ又
ユウニ送ル其甲士三隊トナス第一隊ハ各奇獸皮ヲ
着シ紅天鵞絨ノ外套錦飾ヲナス者ヲ被リタルモノ
十二人各白馬天鵝絨ト銀トヲ以テ其具ヲ飾ルモノ
ニ乗ル
第二隊八士乗共ニ上ノ如クニシテ十八第三隊上ノ
如ニシテ八人未ニ管絃謠歌ヲ以テス
莫斯箇未亜ヨリ三十六里隔ル モサイコ地ニ陳
ヲ屯スト数日又モスクワノ西南一里ノ地ニ壮麗ナ
縣族ヲシテ彼ノ車馬順次ニ此下ニ集ル其人衆凡十
萬餘ナリ
コレヨリ前車馬ヲ以テ女ヲ迎フ即親戚ヘドルイワ
ノウイス ミスチスロウスキヨ 遺族二百人ト共ニ
勿羅尼亜ニ往カシム且白馬十二匹金銀青螺ヲ以
テ鞍ヲ飾リ豹皮ヲ以テコレヲ覆フテ以テ贈ル又
錦螺ノ車輪白馬十二匹ヲ盛ニ装テコレニ属シテ以
テ迎車ト為ス
既ニシテ勿羅尼亜ノ女輪ニ乗シ甲士コレヲ護シテ
モスクワノ都門ニ入ントスル時旋風忽起テ輪馬宛轉
シテ殆ント顛倒セントス都下ノ人コレヲ怪テ相

謂テ云初メ主ノ吾カ國ニ來ルトキ又此風変アリ
又新婚吉礼ノ從者甲冑ヲ被ル何ソ斯ノ如キ凶服ヲ
以テスルヤ又其從車数輛大小数百ノ鳥銃ヲ載ス何
ノ戒有テ備ヲ設ルヿノ斯ノ如甚シキ乎
ソスケイ　嘗思フ主ハ真ノデメトリウスニ非ス彼
即吾邦西亜人ヲ疎シテ偏ニ勿羅尼亜ノ人ヲ親ミ
且他邦ノ小侯ノ女ヲ迎テ婚ヲ爲ス尤怪ムヘキト乃
巨室親戚大官ヲ會シテ議テ云主ハ吾國ノ正儔ニ非
ス亦勿羅尼亜ノ貴族ニモ非ス即姓氏正カラサル
遊行ノ方士ナリ且其法學亦吾邦ノ宗トスル所ノ

モノニアラス但勿羅尼亜密ニ侵略ノ謀ヲ構テ頗ニ
隣好ノ親ヲ結フナリ太タ恐ルヘシ恐ムヘシ吾国家
危キヿ方ニ且タニアリ故ニ吾諸君ト圖テ先主ノ爲
ニ義兵ヲ挙ント是ニ於テ諸臣ソスケイヲ元帥トシ
テ今婚儀宴會ニ來テ機密ヲ発スヘシト其圖ヲ定テ
合契盟ヲナス其衆凡ニ萬ノ兵ナリ漸次ニソスケイ
ガ家ニ聚會スルヿヲ約シテ以テ其時ヲ期ス
入輪八日ノ後宴樂ヲ催ス即假リニ内庭ニ樂楼ヲ構
ヘ喇叭ヲ吹クモノ三十二人大鼓ヲ鼓スル者三十四
人乃舞踊鼓吹已ニ起ル勿羅尼亜ノ人内ニ入テコ

レヲ観ル主並ニ近侍内官恣ノ宴楽ニ耽リ情ヲ放テ
沈酔ス
此夜既ニ明ニトスルニ向テ伏兵一齊ニ起テ都門官
門ヲ破テ盡ク乱入ス時ニ勿羅尼亜ノ人一リモ釵ヲ
帯ル者ナシ或ハ散ジ或ハ擒コトナル近侍内官
皆周章狼狽ス
主心腹ノ臣十五人ト小寢ニアリ亦皆沈酔熟睡ス獨
主忽覚テ乃上衣ヲ脱シ帽ヲ去リ髪ヲ被リ其寢
ノ後壁ニ窓アリ窓外高キ丁三丈即飛テ地下ニ墮
モスクワノ女傅勿羅尼亜ノ女ヲ大衣ニ裹テ私ニセ
ンドミルニ是ヲ送ル
ソスケイ　兵士ヲ將テ主ヲ求ム小寢已毀テ主ノ在
ル處ヲ知ラス室後小舍ノ屋上ニ人アリ死ニ臨トス
其服章怪シムヘシ
ソスケイ　是レニ問テ云ク汝ヨハ二子スバジリデス」ノ
子ナリヤ彼云即是也ト仍テ詰問スルヿ数事一ツモ復
コレヲ答ルヿナシ時ニ一賤人傍ヨリ小銃ヲ發ス彼
人コレニ中テ遂ニ死ス是ヲ於諸人集テ短釵長刀戈

戟ヲ以テコレヲ斬断シテ肩尼トナス其屍縄ヲ以テ
脚ヲ縛シテ路上ヲ曳上刑場ニ送ルソスケイ鞭ヲ以
テ其面ヲ打テ大コレヲ嘲哢ス乃都門ノ外ニコレヲ
磔ス
又ノホコロドノ守ボスマシノウハミカアルタシコ
ウルヒ者ニ刺シテ死タリ又脚ヲ縛テ曳テ刑場ニ送
ル然コレヲ磔ニスコレヲ埋ムニ乞人ノ例ノ如クニス但
デメトリウスハ素ト妖術ノ方士ナルヲ以テ其再生
ヲ恐テ数日ノ後埋処ヨリ出シテ焼テ灰トナシテ

コレヲ埋ム偽主俊オニテ智能アリト雖尼道藝治
術ニ拙シ只軍事兵法弓馬ノ術最其好ム所ナリ且
機ニ長セリ
其体質健剛手足肥大ニシテ常人ト異ナリ進退挙
動甚捷疾ナリ
或云真ノデメトリウスウグリワツニ在ル時コレヲ
認ル人之説ヲ聞ク云右ノ眼下ニ疣子アリ一手一手
ヨリモ短シコレヲ以テ其真偽ヲ徴ルヘシ
憲云原書デメドリウスノ出處事蹟ヲ記ス者真偽
相半スルカ如クニシテ覽者ヲシテ甚分暁シ難ク

シム何トナレハ則云他人見ヲ以テコレニ代フ曰
「ポリスカ」記ニ曰三駿廐ニナシ曰軍師書ヲ刊メト
リウス」ミ通ス曰新キ刊メトリウス」出テ此餘同名
ヲ犯テ出ル者再四ニシテ止マス彼當時ノ人コレカ
為ニ欺ル〻者ニシテ今後慧短才走痲ナルヲ以テ
半信半疑殆ト菽麦ヲ辨セサルカ如シ是ニ於テ瘧痳
コレヲ思テ得ス遂ニ痳ヲカメテコレヲ讀ム十
數旬ニシテヤ、其大畧ヲ得ルニ似タリ凡刊
メトリウス」カ名ハ「ポリデス」ノ末年ニ初メテ

出テヨリミカユロウイス」ノ時ニ発ルコレニ因テ
其前ノ事蹟ニ在テモ亦仍コレヲ忽畧ニスルヿ能
ハサル者ナリ故ニ彼上下ノ草稿ト其詳略相同カ
ラサル者アリ看者宜クコレヲ知ルヘシ嗚乎慧カ
疾齡モシ或数年ノ餘暇アラハ以テ全篇ノ事實ヲ
詳ニシテ再ヒコレヲ草スヘシト云今茲癸丑春
夏大馬ノ年七十一コレヲ誌ス

第三十二世 親戚大臣 ソスケイ 補
慶長十二丁未ノ年ナリ

主魯西亜先王ノ礼儀ニ依テ位ニ即ク然ルニ主自其

王冠ノ重キニ耐サルヲ覺ヘト云且群臣皆和恍ノ色
ナシ或云其夜先主デメドリウスカ堰處ニ鬼狀ヲ見
ルト
初メ先主ヲ弑セル後彼三駿内廐ニ在ラズ是ニ於テ遍クコレ
ヲ求メ且多ク諜ヲ出ス今都亭ヨリ告テ云都尓格ノ駿馬
ニ乘ル者三騎其餘許多ノ從者ト共ニセンドミルノ道路ニ向テ到ル
モノアリト主コレヲ聞テ後患ヲ思テ甚タ安ンセス
然后初メ差レタル諜者還リ報シテ云ク先ニ燒灰ニシタル者
ハ先主ニ非ス是嘗テ其侍臣ノ中主トヨク相似タル者ナリ
其夜コレト衣服ヲ換テ室ニ殘シ其餘ノ心腹ノ者悉ク之ヲ

從テ夜ニ紛レ彼外國ノ領セルセントミルニ入テ潛匿セリト主此ノ
說ヲ聞テ大驚嘆シテ止ニス是勿羅尼亜ノ人專ラ說ク所ナリ
ト云
モスコウノ士民此說ヲ聞テ區々雜說起テ都鄙甚恩劇ス
是ニ於テ主カクリツニ葬タル幼兒デメドリウスノ墳墓ヲ發
テ其柩ヲ出シモスクワ宗廟ノ地ニ改葬シテ其礼義ヲ莊嚴
ニシテ以テ海内復別ニデメトリウスト云者アラサルヿヲ普ク士
庶ニ曉知ラシム
按スルニ置部諜者ノ報スル所信スヘキカ如シ何トナレハ彼ノ兵ヲ
率ル夜只勿羅尼亜ノ人或散亡シ或擒ハルヲ耳記シテ

紅衣三百人ノ動止ヲ記スレハナリ
主以謂今勿羅尼亜ノ主ハ吾尤恨ル所ナリトイヘ尼若コレト
相悪ム片ハ将ニ雪際亜ハ吾ヲ侮ラン西韃ユサッケン既ニ吾ヲ
侵スニカサアルビイテルヲ以テ滅セリ又都尔格ノ如キハ吾國ノ
変ヲ以テ彼カ幸トスル者ナリ隣国既ニ斯ノ如シ然則勿
羅尼亜ハ姑ク善待スルニ如カスト乃盛ニ幣帛ヲ修テ使聘
ヲ為シ書ヲ贈ル
今其贈答ニ書之大意ヲ譯ス但其文辞ヲ修メス
夫勿羅尼亜ハ連界相親ムノ国ナリ然ルニ一二ノ臣僕私ニ
幻技ノ方士ヲ用ヒ偽ニデメトリウスト為レヨヲ輔テ其徒
徒三百人ヲ誘テ以テ吾大寶ヲ掠奪シ吾士庶ヲ惑乱ス
是ニ於テ吾其徒ヲ併テ殺レヨヲ擒ニス足下豈其假
ヲ奉スルヲ知ラサランヤ雖然吾旧交ノ誼ヲ議レス更ニ和睦
ノ信ヲ修ム
勿羅尼亜ノ主レギスミユントス使聘及書ヲ報ス
吾亦何ソ隣国旧交ノ誼ヲ忘レン乎吾カ臣僕トイヘ尼何ソ
偽ヲ設テ大國ノ惑ヲ生スルヲ為ン乎夫デメドリウフノ
舉ハ魯西亜廣大ノ國ナルヲ以テ其遠州ノ士民多クコレヲ
真トシテ各コレニ歸スルモノ有ヲ以テ吾尤以テ假トスル所ヲ
知ラス然ル吾國人デメトリウスヲ望ムヤ西韃ノ人ノ少帝

ヒイテルヲ仰ク者ニシカス豈敢テ其偽ヲ助ルヿヲセンヤ 獨吾
憂ル所ハ魯西亜吾使ヲ擒ニシ吾女ヲ擁ニス吾壻ヲ殺戮ス
如斯不仁ヲ以テ吾ヲ待ツ吾深ク之ヲ鬱悶ス時ニ至ラハ將ニ之レ
ヲ解カントス但仰テ天ノ命ニ從ハンノミ
人說ク主嘗方士カ偽ヲ知ラス宜ク官ニ告テ以テ誅戮スヘシ
何ソ迄然トメ前主郎其凡毒シ朝廷ヲ汚サシメ剌君トシテ之ニ
仕ヘ亦隨テ之ヲ弑ス是他ナシ只此元功ヲ挙テ用サアルノ栄ヲ
図ル者ナリ然レトモ其冠重ク鬼ヲ見ルノ兆禍アリ乃獨リ勿
羅尼亜ニヲ侮ルノミナラス吾大臣親戚士庶皆又之ヲ憤著
多シ之ヲ如此則ハ何ソ人身ノ栄耀ヲ得ルノ道アラント

魯西亜ノ軍帥ニカコフスケイナル者アリ是四ヲ繫ル最功ナル
者

按スルニ名声アル人ヲ立テ以テ衆ヲ誘テ国ヲ乱シ其攘乱ニ乗
シテ自ラ其国ヲ襲取ヲ云ナリ 嘗テ勿羅尼亜ト密ニ謀
ヲ通シテ既ニ二ツノ假書造ル是偽主ヲサシテ一ハデメトリウスカ魯西
亜ノ大寶ヲ偷ムモノ一ハ帝ピイトルナリ今此ピイトルヲセンドミルニ
送リ且デメドリウスニ書ヲ贈テ其答ヲ得タリ 按ニ此ニ云
デメトリウスハ次ニ記スニウウ即新テメトリウスヲ指ナルヘシ即
新ノ言ヲ誤リ脱シタルナルヘシ又先ニ諜者ノ說ニ依レハ偽主ノ
センドミルニ潛匿スルト云ノ然否ヲ試ル為ノ故ニ答書ヲ求ムル

モノヒトヘシ然ヒ原書此後更偽主ノ景迹ヲ記スモノナリコレヲ
以テ証スレハ則新ノ言ヲ脫シタルモノトスヘシ
シカコプスケイ プ土チヲル「其地未詳」ノ人ニ説テ数千人ノ兵ヲ得
又コサックノ人モコレニ加ル又魯西亜ヨリ西韃ヘ行ク戍役ノ
士卒ヲ途ニ遮リ止テコレヲ後ヘ一万人ノ兵ヲ以テ十四五郡ヲ
侵取タリ時ニ三ウエデメトリウスナル者出テモスコウヨリ山
命ノ士卒及ヒ譴謫ノ士ヲ集テ許多ノ兵[illegible]衆ヲ得タリ即次ニ
第三偽ト称スルモノナリ

第三偽デメトリウス上者兵衆加テ相共ニ盟約ヲナレ勢甚
盛ニシテ遂ニモスコウニ近テ陳ヲ布ク主大ニヨドロヒテ
是ヲ防カンヿヲ高議ス
テメトリウスカ軍将ボルトニキナル者其副将ト相爭ヒ俄ニ
彼陳ヲ棄テ九千ノ兵ヲ率テモスコウニ来テ主ニ降ル
主乃コレヲ将トシテデメトリウスヲ征セシムデメトリウスコ
レニ當ルヿ能ハス姑ク其陳ヲ退ケテ漸クモスコウニ去ル
主ボルトニキト共ニロルユカ[地名未詳]陳ヲ進ム
シカコプスケイ[上ニ書ル魯西亜ノ軍帥ナリ]偽ヲ帝ビイトルヲ輔テコサックノ
兵一万ノ軍ヲ以テ主ノ陳ヲ伐ツ主ノ陳コレト戰テ利アリ其
将ボルトニキ敵ノ通ルヲ逐ヒ終ニ敵ノ為ニ擒トナリテ彼ノ陳中ニ
死ス

偽少帝ビイトルテュラニ陳シ布ク此地糧乏ク戦利アラス
主ノ為ニ擒トナル主ユヲ誅シテ磔トナス
匈羅尼亜其貴族ヲ将トシテ六万人ニサツケニ八千人ヲ
出シテ共ニデメトリウスヲ援ク
雪除亜ノ主カアルデテエゲンデ魯西亜ヲ援ントス主リス
ケイ所為ノ他國ノ軍吾国ニ入ルヿ安スヘキニ非スト乃チ
ヲ敢セス
テメトリウス獨自衆ヲ誘フノモナラス魯西亜ノ人漸ヒニ
心ヲ傾ル者多シ即是真ノデメトリウスト思フカ故ナリ
加之匈羅尼亜ノ大家皆ヒ専ラヿヲ真ナリトスルヲ以テナリ

主ノ軍初十七万ノ兵アリ然ル戦竟ニ利アラス兵勢大ニ
減少ス乃主退テモスコウニ入リ餘兵五千人ヲホスコウニ
其地未詳 止ノテ敵ヲ防カレムデメトリウス急ニ軍ヲ進テ
ホスコウヲ囲テユヲ攻ム城兵ユヲ支ルヿ能ハス悉ク
メトリウスニ降ル
デメトリウス魯西亜ヲ伐テ大ニ勝利ヲ得タリ且魯西亜
ノ将ツサルキ匈羅尼亜ノ軍ノ為ニ擒ニセラル其取所ノ
兵五千人皆ヒデメトリウスニ降ル
主匈羅尼亜ノ擒ヲ安撫シテ送リ帰シ且彼ノデメトリ
ウスヲ援ル兵ヲ退ケラレンヿヲ請ヒ其欲スル所ニ従テ贖

金ヲ贈ラント云是ニ於テ勿羅尼亜ノ軍モスコウヨリ五十
里ノ外ニ退リ
デメトリウス二千騎ノ士ヲセンドミルニ贈ル是先ノデメトリウス
カ寡婦ヲ迎ヘテ吾偽ヲ覆ンカ為ナリ此ヨリ後微行シ
テセンドミルニ来リテ密ニ其心事ヲ相語ル吾将ニ日アラス
シテ魯西亜ノケイセルノ位ニ登ルヘシ即時汝カ女ヲ逐ニト
云彼ノ主亦魯西亜ニ他ヲ報セントヲ思テ之ヲ諾シ乃
婚姻ノ約ヲ為ス
慶長十四己酉ノ年主イノランドヲ雪際亜ニ贈テ援ヲ求ム
彼ノ主カアル五千ノ兵及騎七其数ニ適シ之ニ応ス

勿羅尼亜五万ノ軍ヲ出シテモスコウヲ伐タントス又其属
州カミニイキヨリ二千ノ兵ヲ出シテコレニ加ハル乃直ニモスコウ
ニ入テ大ニコレヲ伐ツ主當ルヿ能ハスモスコウヲ棄テスモレンスコ
ニ遁ル乃モスコウノ内魯西亜ノ兵一人モ無ニ至ル獨リモ
スコウノ大臣セヘリイ止テコレヲ防リトイヘ尼耐スレテ亦
遁テスモレンスコニ向フ勿羅尼亜ノ主レギスミユンドスニ万ノ
軍ヲ将ヒテスモレンスコニ向テコレヲ攻ム主ゾスケイ終ニコ
レニ降ル（ゾスケイ捕ニセラレテ死スルヿ下ニ見ユ）
ブリスラウ ロストウノ二州デメトリウスニ帰服ス
慶長十五庚戌ノ年デメトリウス三四ノ州郡ニ主トナリ乃

先偽主ノ寡婦ヲ迎ヲ僭レテ魯西亜ノ尊号ヲ簒ヒ自ラ
東西法教ノ帝ト称スモスコウニ主タル者無キヲ以テ其郡
縣多クコレニ従フ
雪際亜テウアルニ入テ陳ヲ布キデメトリウスヲ伐トス
時大雨フルヿ三日夜急ニ軍ヲ出スヿ能ハス其戦利ア
ラスシテヒンランドニ退ク
魯西亜ノ将軍スコピンヒ即降主ソスケイカ甥ナリ大ニ倉廩ヲ発テモスコ
ウノ荒廃セル飢民ヲ救フ国人大ニ其恩恵ヲ感シテコレヲ尊ン称シテ
都邑ノ父ト云大臣親戚コレヲ奬メテ勿サアルニ立ンヲ商議ス降主ソスケイ
コレヲ知テ竊ニ其甥スコピンヲ毒殺ス

勿羅尼亜ノ主デメトリウスカ自恣ナルヲ悪ム時ニ彼聘礼使節ノ
者ヲ見テ毎ニコレヲ嘲哢ス其意彼臣ヲシテ主疎セシムルニ在リコレニ
因テ彼大小ノ臣僕漸ク去ルスル者多シ是ニ於テデメトリウス始ク
セントシルノ地西韃ニ遷リ處テ士庶ヲ試ントヲ思ヒ先其地理ヲ
検察セント欲テ従者数騎ニシテ微行ス然ルニ其途ニ宿怨アル
者アリテ終ニコレカ為ニ道路ニ殺サル
夫當今魯西亜ノ国タル一大戦闘ノ観場トナルデメトリウスカ去
テ後遂ニ勿羅尼亜ト雪際亜トト相爭テコレヲ取ル是ニ於テ降主
ソスケイ竊ニ逋テ寺観ニ入テ潜居ス
勿羅尼亜其子ヲチスラウスヲ推テ勿サアルニ立ントスモスコウノ大

ロシヤ開国
未来ハ
有ント愛

第三十三世 他姓 勿羅尼亜王之子

ウラヂスラウス

臣親戚コレヲ如何セスル一能ハス即其位ヲ奉ス

凡魯西亜古ヨリ未曾有ノ不正ノ主又未曾有ノ無名ノ戦且分割セル国体ト云ヘシ挙テ以テ嘆スヘキ哉

デメトリウスカ領セル州郡勿羅尼亜ヲ取ル若シ其臣僕従ハサル者ヲハ悉クコレヲ屠ル（按スルニ是勿羅尼亜ニ属セル州郡ナルヘシ）

勿羅尼亜ハ素ト羅瑪ノ法教ヲ宗トス然ルニ今「ウラヂスラウス」位ニ即クニ及テ厄勒西亜ノ法ニ非レハ魯西亜●刃サアル」ノ号ヲ受ル一能ハサルヲ以テ乃其国法ニ依テ厄勒西亜ノ教ヲ受テ即位ス

デメトリウスカ妻ニリナ」男子ノ衣服ヲ着シ丈夫ノ状ヲ為テ「ツケ」ノ人五十騎ヲ従テ西韃ニ到ラントス其夫ノ死後幾日ニシテ男子ヲ生ム其父ノ名ヲ嗣テデメトリウスト称スコレヲシテ第三偽デメトリウスカ所領ノ地ニ虚ラシム

（按スルニ是モスコウニ近州郡ナルヘシ西韃ハセントミルニ隣レル国ナリ即ニリナカ父ノ所領ノ地亦此愛ニモアルナルヘシ）

凡モスコウニ主無キ一三年ニ及ハントス独テオポルス ミスシスラウル者縣邑ヲ統ヘ治ルモノアリ即其下三部ニ分ル其一ハ法主有テ宗廟寺観ノ属スル所ナリ

其二ハサカリアスリツヘノウカ治ムル所及テメドリウスデンテウエデンカ（テレテウエデントハオニ世ヲ云ナリ即オ三偽テメトリウスカ子ナリ）領セル所ノ分ナリ

其三ハウラヂスラウスカ所属ナリ即勿羅尼亜ヨリ士卒六千人来リ

城内城外在スル者ナリ但其法教ノ異ナルカ為ニモスコウノ人ト時ニ争
論シテ動レハ鬪諍ニ至ルノ其寺観勿羅尼亜ノ宗ニ非サル者ハ鳥
銃ヲ以テ浮圖伽藍ヲ破リ火ヲ放チ悉ク灰塵トナス降主イハ
ノウイスソスケイ寺中ヨリ求メ出サレ擒トナル後獄中ニ死ス
魯西亜ノ人勿羅尼亜ノ貪戾殘虐ヲ恶テ彼父子ノ主ヲ密ニ
嘲テ老狗弱狗ヲ以テコレヲ呼フナリ
勿羅尼亜人モスコウノ人ト毎ニ相爭ヒ相恶テ鬪競止ムヿナシ然ルモ
モスコウノ人性勇悍ナリ故ニ勿羅尼亜人時ニ困辱セラルヽ者ハ
輙チ竊ニ放火シテ以テ憤ヲ散ス因テ時ニ火災アリ一日風アリ火
一處ニ起テ未消ヘス又四方ニ起ル風烈ヲ煽熛シ竟ニ熄ス遂ニモスコウ

ノ都下凡ソ八万家未昼夜ナラサルニ尽ク焼ス只城塁石壁石橋ノ
残ルノミナリ即無数ノ焦屍道路ニ滿テ灰燼ニ埋タリ
雪際亜ノ縣令主ニ告テ云フレスコウ勿羅尼亜ノ属州ニ人アリ其人トナリ辨口
利舌能談論ス自言吾是ヨハン子スパチリテスノ子真ノデメトリウ
スノ也ト主召テコレヲ見テ彼レ魯西亜ノ再興ヲ助ラレンヿヲ請フ
主乃コレヲ審ニシテノ其偽ナルヿヲ知ル然ルニ今コサツクノ事アリ
サイハイニ其オヲ試ン為メニ彼軍中ニ屬シテノ戦シム一日敵箭ニ中
テ命ヲ落ス是則嘘偽デメトリウスナリ実ハ舊モスコウ外邑ノ一
書生ナリ

千六百四十一
慶長十七壬子年　雪際亜ノ心トハ（即公ト云モノカ如シ）カアレルヒリップ即主次子

ナリ嘗テ私ニ魯西亜カサアル ノ位ヲ奪シテヲ謀ル今歳主カアル子エゲ
シデン病ニス長子嗣テ主トナル是ニ於テヒリップ主説テ魯西亜ヲ
伐シコラ議ル
魯西亜ノ大臣親戚先王ノ正儲タル人ヲ求テモスコウニ主タラシメンヲ商
議シテ廣タコレヲ探索ス即羅瑪ニ到リケイセルニツチアスニ請テコレ
ヲ撰ミ但彼儲商人稀ナルヲ歎ス其自ラ是ナリト云者アレハ
亦デノトリウスカ類ナリ
此時勿羅尼亜ノ軍帥ソリキイウスナル者其縲紲ノ中ヨリ一少年ヲ
拳テ主ニ告テ云是コストウモスコウノ正隣州名法堂是ノ人ノ母
黨ノ国ナリト主即コレヲ出シテ別ニ僻處ヲ与テコレニ居シム時年
十七即ち刑ツケノ庶人ニシテ彼ノ軍ニ從フ兵卒ナリ魯西亜ノ大臣コレ
ヲ傳聞シテ急ニ羅瑪帝ニコレヲ告ク帝コレヲ詳審シ得テ乃勿羅
尼亜ニ命シテ彼少年ヲ魯西亜ニ送リ並ニ大位ヲ歸サシム勿羅尼亜
初メ以謂少年ハ歇地ニ鹵獲スル所ノ者ナリ乃脱スヘカラストシテコレヲ難
ス然レ氏原其罪ニ非サルヲ以テ固クコレヲ拒ムノ辞ヲ得ス且其大位モ
久シテ久持スヿカラサルニ係ル則終ニ皆命ニ從フ是ニ於テ魯西亜ノ大臣
親戚コレヲモスコウニ迎テ魯西亜ノ主トナス時ニ
慶長十八癸丑ノ年ナリ

魯西亜本紀畧草藁巻ノ一終

魯西亜本紀畧草稿巻之二

第三十四世

○ミカアル ヘドロウイス ロマノフ

父ハペトルニキメロマノウイス即先王テオトルスイハノウイスノ従母兄ニシテ又其妹夫ナリ初モスコウノ高官ニシテ後ロストウノ法堂ノ法主タリ今モスコウノ法堂ニ遷ル

母ハ先王ヨハンネスパリウイスデ・テウエデノ女

主初モスコウニ入ル時雪際亜コレラ妨ルトイヘ尼其守護厳固ナルヲ以テ竟ニ恙ナキヲ得タリ

千六百四十二
慶長十八癸丑ノ年即位ス

主先勿羅尼亜ノ侵セル地ノ彊界ヲ固シ其餘都邑ノ修理ヲ専
ニス次ニ羅瑪ノケイセル一ツチアスヘ厚ク聘礼ヲナス
第三偽テメトリウスカチデメトリウステテ左エデ及ヒ其母ニサナラ誅ス又コノ
後四年ニ雪除亜ノ都ニデメトリウスト称スルモノ来ルアリ雪除亜三
百人ノ士ヲ以テスモレンスコノ戍役ニ増
雪除亜ノ公ヒリツプカサアルノ望ヲ失ヒ其主ト共ニ勿羅尼亜ト和平シテ魯
西亜ヲ侵レアヲ謀ル
慶長十九年甲寅ノ年（千六百四十二）漢又利亜ト和蘭トノ二国ヘ聘使ヲ差ス
按スルニ此二国ト交ヲ通スル者此時ヲ始トスル歟是雪除亜ノ為ニ豫メ備
フル者ナルベシ各門ノ地勢ヲ察シテコレヲ謂ヘリ

勿羅尼亜既ニ犯ス所ノカサアル一ノ位ヲ除カルヽヲ憤リテ雪除亜ト和シテ
共ニ魯西亜ヲ侵スノ謀計ヲ図リ且スモレンスコノ戍役ヲ増スヿ三倍ニス
元和元乙卯年（千六百四十五）雪除亜ノレスコウ三万ノ兵ヲ加テ軍ヲ出
セリ魯西亜軍ヲ出シテコレト戦フ而メ未利アラス
同二丙辰ノ年（千六百四十六）勿羅尼亜私ニ魯西亜ニ説テ雪除亜ト和平セ
ムヿヲ乞ウエリ未詳ニ於テ成會ヲナス即今ヨリ後十五
年間互ニ干戈ヲ動ス可ラサルノ盟約ヲナス
主顔敗スル國ヲ受テ廢ヲ興シ絶タルヲ継キカヲ竭
シテ国ヲ治メ民ヲ安セシヿヲ勤ムヿ乃日ト三ヲ安處スルヿナク勉焉
トシテ修理経営ス且其国ヲ備セント欲スル者只勿羅尼亜雪除亜ノ近キニ

アルノミナラス都尓格西鞋寺遠クコレヲ望ムモノアリ今再ヒ帝号ヲ
新スルヲ以テ各〻面ニ服従ノ色ヲ見ヌト雖ヒ悉ク私ニ陵犯ノ意ヲ
含ミテヲ知ル故其疆界ノ固ヲ厳スルヲ以テ急務トス
サモエデン（亜西ノ北西水海ノ濱ノ属国ナリ）古未（ヘイデチン）（有像ノ神ヲ尊ミ如意吉祥ヲ禱ルヲ専トスルノ法教ノ名ナリ）ト云法教ヲ宗トセル国ナリ主尼勒畢ノ法ノ教師
ヲ差シテ其教ニ化セシム又此国金山多シ乃洲瑣尼亜ノ
（入尓馬泥亜ノ属国）鑛工ニ命シテコレヲ鑿ラシム多ク金銀及ヒ
諸ノ金ヲ得タリ
主嘗テ其父ノ友クダ人ノ女エウトシヤルカノウナヲ室トス
今茲

寛永七庚午ノ年彼三月十七日男子ヲ生ム名ヲカサアレ
ウイスアレキシス ミカエロウイス ト云
同年彼九月和蘭ノ船来ル是交易従ニ主ノ生男ヲ賀ス
ル為ニ聘使アルベルト クウレランド ホルグト ヤンヘルトリイル ナル者
ヲ以テス
此船六月十一日ニデキセル（北ヲランドノ北ニアル島ヲ）発シテ八月廿
日ニアルカシヤルニ着キ九月八日モスコウニ来ル即文武ノ
官人数百騎ヲ以テコレヲ迎テ客館ニ入レ十月二十四
日都城ニ入ル
其聘物貨品及送迎ノ儀ヲ記スル者甚詳ナリ今ニシ

ヲ畧スト其堂上相見ノ時主及侍坐スル者ノ服章等
ヲ採録ス

主堂上ニ於テ二使ヲ見ル主玉座上ニ坐シ金羅沙ノ
衣ヲ著ス冠悉ク真珠ヲ以テ飾ル其天頂大テヤマシ
テヲ安置ス手ニ金策ヲ持シタリ
法主（即主ノ父其位主ニ亜ク者ナリ）（トルニキナリ）凡法主ハ法師ノ長ニシテ主ノ
右ノ玉座上ニ坐ス法衣ヲ著シ金果冠ノ天頂金ノ縦
横延ヲ立ル者ヲ戴ク
主ノ左ノ玉坐上ニ金色ノ方錐形ヲ置キ玉冠ヲ其上
ニ加フ是則假リニ幼児（カサアレウイス）ノ位トナスモノナリ

又主ノ位下ニ四童子アリ玉座下ノ四隅ニ立ツ皆白
帽白衣ヲ着ス各肩上金斧ヲ掛ケ金絲連ヲ頸ニ懸テ
胸前ニ相交ヘ其両端ヲ垂タリ
又法官ノ第四品ナル者十五人傍ニ侍ス
又堂中四壁諸臣圍繞ス一臣両使ニ主ノ言ヲ傳ヘテ
乃ハンドキュツセン（是和蘭言即二人各一手ヲ出シ
其四指ヲ伸テ相合シ互ニ握ヲ云乃各和睦ノ意ヲ通
スルノ義ナリ）
而二使共主ヲ拜ス主及法主各玉座ヨリ下リテ入ル
翼辛未（十六百六十一）ノ年彼十一月廿八日和蘭ヘ使聘ヲ差テ前礼ヲ

報ス

勿羅尼亜前ニ千五百十二年ニ於テ盟約ヲナストイヘ𪜈其子帝号ヲ廃セルヿヲ惋惜シ魯西亜ニ倫ヘタル軍ヲ退ルヿナク毎ニ其疆ヲ侵スヿヲ止メズ且彼国ノ法教ノ師ヲ竊ニ吾邊際ニ近ツケテ亟リニ人民ヲ彼カ教ニ導キ入テ感乱セシム

寛永九壬申ノ年（千六百三十二） 主ズモシスコニ十万ノ兵置ク然𪜈勿羅尼亜ノ為ニ敗ラル且西韃コレニ乗シテ其邊際ヲ侵ス魯西亜ノ将帥ミカアルボリツウィスヒシ副将イスマルコッセン共ニ罪ヲ得タリ

寛永十癸酉ノ年（千六百三十三） 法主ヘドルニキノ主ニ訓テ云

凡国ニ君タル者ハ自持スルニ博愛ノ心ヲ以テスヘシ古今近隣ト相爭フ者ハ假使一旦ハ利ヲ得ルトイヘ𪜈能ク久シク有ツモノ鮮シ吾日撃スル所ヲ以テコレヲ鑒ミルニ（昂テオトルスナリ）ブウトルボリスデメトリウス ツスケイヲイスラウス倶ニ皆人ヲ愛スル心ナキモノナリ如今博愛ヲ以自持スルトキハ則勿羅尼亜ノ残暴ニ相似ス可シ乎夫古器ヲ以テ威ヲ示スハ仁術ヲ以テ徳ヲ施スニ如ザル ナリト主此訓ヲ服膺シテ専ラ和平ヲ主トシテ諸大臣ト常ニ只コノ事ヲ商議

訓詞

千六百六十三
同十一 甲戌ノ年彼正月 仏羅尼亜ト和平ス
ポルステインノ〈ハ尔馬尼亜ノ属公爵ノ国ナリ〉主ヨリ
使聘ヲ来シ且巴尔西亜カ主魯西亜ヘ使聘ヲ交ヘ外邦
ニゲルニ貨舶ヲ通セン事ヲ欲スルノ意ヲ傳フ主ヨレ
ヲ許諾ス
主勿羅尼亜ノ主ヲギスラウト和睦シテ交ヲ篤クス
只外邦ノ防キヲ相助タルノミナラス国内ノ治術ニ
於テモ相議スルニ至レリ ヲギスラウス素ト虎狼
ノ心アリ今博愛ノ徳ニ化スル者自然ト斯ノ如シ主
吾国ノ政治ヲ新ニシ国人咸コレヲ悦フ又近隣ト朋
友ノ情誼ヲ篤フスルヲ以皆コレヲ信服セリ其餘徳
義ヲ仰慕シ且ツコレヲ畏敬スル者多シ是ヲ以テ使
聘ヲ通スル国遠ク亜細亜ノ地ニ及ヘリコサッケンノ
如キ毎ニ勿羅尼亜ニ随テ屢〻吾ヲ侵ストイヘ𪜈即
今勿羅尼亜ト和睦セルヲ以テ吾コレカ制戒ヲ設ケ
ズトイヘ𪜈彼自コレヲ憚リ且西韃都尔格寺モ又頻
ルコレヲ怨ルニ至ル
一千六百七十三
正保ニ乙酉ノ年彼二月十二日主病ヒス時年四十九国
人悉クコレヲ悲歎失動ス皆其父ヲ喪フガ如シ

凡魯西亜数百年前未斯ノ如ク徳化普ク下民ニ及フ
ノ主アラサルナリ
子女アリ プリンス（王ノ男子ヲ云）カサアレウイス アレキシス
ミカエロウイス（プリンセス（王ノ女子ヲ云）イレナ此世ホルステイン ニ
婚約アリ未嫁セズシテ没ス（プリンス）位ヲ嗣ク年未十
六ニ満タス故其母政ヲ輔ク

第三十五世 ○カサアレウイス アレキシス ミカエロウイス

按凡遠西ノ国周歳ヲ以テ年記ヲ計フ故未満ヲ云ヘリ
（プリンス）位ニ即クニ魯西亜先王ノ礼ヲ審ニシテコレニ
依ル

（原書其儀ヲ記スモノ甚詳ナリ今コレヲ畧記スルモノ左ノ如シ
即位礼大廟ニ於テ即位ノ礼ヲ行フニ先ツモスコウノ大廟ノ堂
ニ三階ノ壇ヲ設ク其上ニ坐凳（即椅子）三ツヲ列又其
一ハ（カサアル）ノ座トス一ハ法主ノ座トス一ハカサアルノ法
服ヲ置ク即真珠ヲ以飾ル帽子ト華曼繡ノ上衣ニ精
好ノサアベル（獣名）ノ皮ヲ以テ純トナス者トナリ此二種
ノ間ニ一椅ヲ置キコレニ（デヤマンテ）ヲ飾レリ冠ヲ掛ケ
タリ
法主（毋ニ至ノ祖父ナル者子）三品ノ教師数人ヲ従ヘテ（プリン
ス）ヲ偕テ寺観ニ到リ大廟ニ入ル廟下乃歌楽ヲ奉ク

法主先壇上ニ升テ凳ニ坐ス歌樂止マル乃法主法言
ヲ以テ神ニ告ク即親ヲ親シ隣ヲ和シ国統永ク今日
ノ如キラント云ノ義ヲ以テスルナリ然テ輔佐ノ臣
「プリンス」ノ手ヲ接シテ法主ノ前ニ對シ階下ニ拜テ曰
「プリンス」ノ諸臣先主ノ諸親ト謹ミ議テ通法ニ依テ爲
父子相續ヲ云「プリンス」ヲ位●即カシメントス「プリンス」亦謹
テ先王ノ法服ヲ授ラン「プリンス」ヲ請フト是ニ於テ法主「プリ
ンス」ヲ檀上ニ進メ坐凳ニ居ラシメ乃「ヤーシテ」ノ縱横
斑ヲ其額ニ當テ神ヲ念シ禱ル初禱次ニ教師二人凳
上ノ帽子ト上衣トヲ取ル侍臣四人階ヲ升リテ其上

衣ヲ受テ「プリンス」ニ被セシム法主再ヒ縱横斑ヲ其額
ニ當テ再念禱シコレニ帽ト冠トヲ戴カシメ乃チ
先主ト「プリンス」ト神トノ名ヲ称シテ念禱ス「即第三禱」
又古ノ諸聖人賢哲ノ名ヲ称シ乃チ又念祷ス即四念
祷畢テ座ニ處シ少焉シテ再立ツ時ニ再歌樂ヲ起ス
其歌ヲ聞ルニ嗟乎鬼神万民ニ仁アリト言ヲ以テス樂止
テ然後カサアル座處ス乃教師一人祭臺ヲ「和蘭言アルタルト呼ブ所者」
即新ヲ積ミ火ヲ燎ミ以テ天ヲ祭ル高臺ヲ拜シテ頌シテ云天神吾カサアル
ヲ祐ケ魯西亜ノ先主ノ霊万民ヲ愛憐シ康寧長壽ナ
ラシメヨト云次ニ堂中諸人同声ニ此頌ヲナス然後

「カサア」立テ乎ヲ以テ堂上ノ諸臣ノ額ヲ撫シ且「ハンドキュッセンス」「訳上ニ出ス」是ニ於テ法主階ヲ下テ及テカサアルニ向テ謂テ云夫大国ヲ有チ尊号ヲ受ル者ハ全ク天神ノ仁徳ニ頼レリ故ニ法教国政皆天ニ順ヒ仁ニ依ル教ハ以テ民ヲ正フシ政ハ以テ民ヲ養フ所以ノ者十リ凡治道ハ万民ノ由テ帰スル所十リ今天コレヲ爾ニ任ス其職最重トス如其苟モ事アラハ輙必天意ヲ顧ルヘシ天意ヲ知ント欲セハ則須ク古ノ危勤西亜ノ法ヲ信シテ以邪ヲ闢キ正ヲ奉スヘシ是則政ヲ為ノ本ナリト教戒シ了テ又念祷ス「カサアル」コレヲ拜ス

乃堂下歌樂起ル「カサアル」ト法主ト各ヽ路ヲ分テ寺門ヲ出ツ出訖テ樂止ム即位ノ礼畢ル　是古礼ヲ用ルモノナリ　近世用ル所ハ小クコレニ異ナリ即ベテルデコロオテノ新修セル所ノ者ナレハナリ

即位ノ後八日主ノ母病亡スヽレニ因テ其親戚遠ク都ヲ隔タル一州ニ主タル者ヲシテ都ニ召テ政ヲ執ラシム　ボリスイハノウイス　モロソウナル　モロソウ　主ニ親シムニ善柔ヲ以テシ威ヲ假ルニ婚姻ヲ以テス　即イリヤダニロウイス　ミロスラウスキナル者ノ女ヲ主ニ奨テ室タラシム乃ミロスラウスキカ女ヲ入レテ室トス

正保四丁亥ノ年　主

其八日ノ後 モロソウ主ノ室ノ姉ヲ迎テ妻トス
モロソウ其外舅 ミロスラウスキ刑官 レボンチステハノウイス
ブレッヱオウ 元者ト大政ヲ相攝ス即三師ト云カ如シ コレヲ
三攝官ト称ス然ルニ只倉廩ヲ實ルヿヲ急務トシテ
生民ヲ養フヿヲ忽畧ニス故ヲ以先主寛仁ノ政日アラ
スシテ收歛苛刻ノ政ニ変セリ モロソウ素收歛ノ意
十シ而ルニ今大府ノ官 ナサリ イハノウイス チストウ
ビイテル テイコノウイスト云者ノ二人ノ言ヲ用テ鹽官ヲ
置テ新量ヲ制シコレヲ用テ官府自ラ鹽ヲ賣ル
又鐵ヲ以新度ヲ制シ鞫敎ヲ刻シテ官尺ト号シテ四

方ニ頒ツ若舊度量ヲ用ル者アレハ重贖ヲ以テコレヲ罰
ス斯ノ如シテ諸州ヨリ收納スル所ノ鹽價罰金數日ナラ
スシテ宦庫ニ收ル所凡數十金ニ及ヘリ
ブレッヱオウ刑官ヲ司テ犯罪ノ人ヲ罰スルニ其罪ノ軽重
ニ随テ一二金ヲ以テコレヲ贖フ
是ニ於テ諸民大ニ困白シテ都下ニ出テ愁訴スレ𪜈敢
テ是ヲ聽モノナシ時ニ
慶安元戊子ノ年後七月六日 主祭祀ノ事有テ宗廟ニ
行ノ其還路ノ傍ニ困民群聚シ伏テ困泥ヲ歎クブレッ
ヒオウ 後ニ從ヲヲ見テ困民コレニ近ツカントス彼レ急ニ馬

ヲ奔ラセ直チニ遠處ニ逃ル困民乃モロソウフレッセオウ
テイコノウイス及チストウカ家ニ聚テコレヲ蹈ツ即皆門ヲ
倒シ屋ヲ破リ衣服ヲ裂キ財貨ヲ擲ウ其狀皆醉乱狂
躁其勢鬼陣魔軍ノ如シ塵土空ニ飛ヒ煙炎傍ニ起ル
但酒廚ヲ発テ群飲スルノミニシテ其餘ハ秋毫モ犯スコト
シ此時衛兵官吏徒ニ遠ク望テ一リモ近ツクモノナシ深夜
ニ至テ尚且止マトナシ
モロソウ プレッセオウ テイコノウイス皆逋亡ス獨リ チストウ
ヲ得テ杖ヲ以テ撃殺シコレヲ糞中ニ投シタリ
主遂テ即時三攝ヲ召ス ニ未ラス乃諸官トコレヲ議シ
テ且タニ至ル翌七日主大臣 ミキタイハノウイス ロニノウニ命
シテコレヲ鎮メシム主素ヨリ其人仁愛ニシテ特ニ下民ヲ憫
ムヲ知ル故ナリ ロニノウ困民ノ長ヲ官ニ召テコレヲ見
テ慘然トシテ冠ヲ脱シテ徐ニ謂テ曰カサル初テ汝等カ積
慍ヲ知テ大ニコレヲ憫ム故ニ吾ニ命シテ汝等カ欲スル所ヲ
聽カシメテ以テ其慍ヲ解ントセリ困民對テ云恩君カサアル
ノ寛仁ノ詔ヲ示サル即野人等放心狂乱方纔ニ安シタリ
但野人等カ欲スル所ハ三官人ノ罰而已所謂 ボリスイハノ
ウイスミロソウ レボンチスチノハノウイス フレッセオウ ビイテル テイコノ
ウイスナリ前主ノ統御ミテノ新ニ成セル大福地ヲ忽変

シテ寺刻貧窮ノ国ト為ス是即三摂官カサアルヲ罔トナシ
上ニ奉スルヲ名トシテ實ハ下ヲ剥キ急催暴歛以テ其獲ル
所ヲ縱シスルカ故ナリ
ロミノウ曰汝等カ欲スル所理ニ當リ即カサアルニ奏シテ速
ニ此三人ヲ罰スヘシト云云（以下ノ語ヲシテヲ畧ス）
此ヨリ初既ニ急ニ逃亡ノ三人ヲ求メシム即日フレツセオウ
ヲ得テ市ニ出シ衣ヲ裂キ脚ヲ縛シ道上曳テ後大刑
ニ行フ
モロソウ夜ル竊ニ ロミノウカ家ニ来ル ロミノウコレヲ一室ニ匿
ス

八日テイコノウイス モスコウヨリ二十里ヲ隔タル處ノ寺觀ヨリ
尋子得タルヲ市ニ出シテ斧ヲ以テ首ヲ刎ス
ロミノウ主ニ告テ モロソウニ命シテ收歛スル所ノ官府ノ
金ヲ出テ悉ク困民ニ還シ与ヘシム乃モロソウ官ヲ罷メ
仕ヲ致サシム
モロソウ都門ヲ出ル時困民路傍ニ拜シテ万歳ヲ呼フ
ミコロスラウスハ内政ヲ司テ外事ニ與フスト（ヲ）イヘ（ヒ）官ヲ罷
メラルヽ乃仕ヲ致ス
（憲按スルニ野人官ニ對シテ摂政ノ罪ヲ論スルニ直ニ而悼ルヿナリ）
又既自從ニ三公ノ家ヲ遊チ大官人ヲ殺シ方ニ其餘

ノ三人会計ヲ説ク実ニ天ニ代テ罰ヲ行フト云ヘキ歟又ニノウ
彼ノ上ヲ犯セル狂蕩逆乱ノ民ヲ待ツモノ斯ノ如キハ即上天ノ心ト
云ヘキ歟或然ラズンハ三日ヲ出スシテ同政更正ノ民万歳ヲ呼ヒ
都鄙静謐ナルヲ得ヘケンヤ

数年前ウヲログダト云曾西亜ノ属州ニ住ル布商ノ子千モヲ
アンクヂナト云者嘗テ州中ノ学校ニ入ル其父彼レヲ凡庸
ニ非トシテ懇ニ教師ニ托ス長シテ文才学識アリ法官
ノ四品ノ教師ト友善ナリ教師コレヲ愛シテ其女ヲ以テ
コレニ妻ス教師死シテ後其餘財ヲ得タリ其中珍奇ノ宝貨
アリコレヲ沽テ数千金ヲ得タリ一子アリ今尚幼ナリコレヲ親

友ニ与フ其後一日深夜ニ及テ妻ヲ小室ニ置テ其戸
ヲ鎖シ自火ヲ放テ家ヲ焼キ夜ニ乗シテ逃亡ス近隣
千モヲカ挙家共ニ死セリトス時ニ寛永二十癸未ノ年
ナリ後千モヲカ臣僕数人ヲ従テ勿羅尼亜ノ都ニ来リ
云ク吾ハ是曾西亜前代ノ主ワシリウス イバウイスソス
ケイカ子イハンソスケイナリト又或ハコレヲ真トスル者アリ幾
日ナラスシテ去ル後欧羅巴ノ諸国州郡ヲ経歴ス彼諸主
或ハ疑或ハ真トシテ頗善遇スル者アリ雪除亜ノ主ノ如キ
殊ニコレヲ友愛スルニ至ル

〔原書諸国州ノ事ヲ詳ニス今コレヲ略ス〕

時ニ魯西亜ヨリ諸國ヘ使スル人コレヲ見聞シテ歸テコレヲ告
クホルステイニノ主彼偽ナルヲ知リ捕テ獄ニ繫キ其事情ヲ
審スル年餘ニシテ議擬已ニ定テ
兼應二癸巳年モスコウニコレヲ送ル乃都外ニコレヲ刑ス
即大谷ヲ以テ先四肢ヲ分チ斬テ後頭ニ至ル各柱頭
ニ釘貼シテ刑場ニ立テ餘体ハ犬ニ残食セシム
チモスカ従者コスカコニッコウナル者自其主ニ代テ刑セラレンヲ
請ヒタリ法主コレヲ聞テ甚憐ムコレニ因テ彼カ右手ノ三指
ヲ斬テ石幣利亜ノ遠島ニ流ス
此後日アラズシテ勿羅尼亜ノ使聘来テコノ刑場ヲ見テ

頗ル不平ノ色アリ以来又一種貢物ヲ出ス是亦勿羅尼亜
ノ養ヒ成ス所ノモノナリ後ニ記スルヲ見ルヘシ
勿羅尼亜ノ主ヲイヌスラウスニス其弟ヤンヤシミルコレヲ嗣
ク其先主即兄ノ寡婦ヲ以テ室ト為ス
勿羅尼亜ノ前主曾西亜ト和平ノ時年毎ニ許多ノ金
ヲ貢ヒンヲ約ス後数其貢ヲ懈リ且漸ノ其疆界ヲ侵
ス然ルニ「カサアル」コレヲ責メズ且怒ラズシテ稍其邊際ノ戍役ヲ
増テ倫ヲ專ニス後又雪涤亜亦吾疆界ヲ侵スコトニ於テ「カ
サル」遂ニ軍ヲ出テ二國ヲ征スル七ケ月ニシテ皆和平
ス

此軍事其地名交戰等ノ未詳ナラサルモノアリ今コレヲ畧ス

コサックノ主ステンコラジン交易船ニ兵ヲ伏セテウルガ河（即北高海ニ入ルモノナリ）ヨリ北高海ニ到リヤイクノ邊ニ上テ陣ヲ布シ其士人ニ賄テ交易ノ通シ以テアストラカン（魯西亜ノ屬国）司縣シヨルテウス伝者ニ親近シ遂ニ迫テ急ニ攻ム司縣防ヲアタヘズ其所屬ノ戍卒ヲ從ヘテコレニ降ル此ニ於テ列コラジン北高海濱ヲ侵代ス

魯西亜ノ軍師アレキセウイスドルゴリュキ一万五千餘ノ軍ヲ率シテアストラカンニ行ク其道傍西韃ニ向フ岐路毎ニ各三十四十五十ノ磔ノ列スルヲ見ル皆アストラカンノ戍卒ナリ士人ノ説ノ聞ニ未三月ナラスシテ人ヲ殺スヿ二千ニ近シトス是悉コサックヨリ懸ル所ノ磔ナリ

主大軍ヲ從フ所ノ魯西亜ノ屬国アリニ到ル軍將コスタニスサルバトウ彼戰死ノ戍卒多キヲ吾ノ是則アストラカンノ司縣シヨルテウスカ所屬ノ戍卒ナリ

コサックヒ此地ニ出テ陣ヲ布ク主ノ軍コレヲ征ス即戰テ大ニ利アリ然五吾人ノ刑敎戰死スルモノ殆十万ニ至ル主其人ヲ殺スヿノ甚多キヲ憂テ大ニ歎息ス

コサックノ主ステンコラジン及其弟ソルカヲ縛シテノ魯西亜ノ軍中ヘ送リ罪ヲ謝シテ和平

ヲ請フ魯西亜此二人ヲ大刑行ヒ終ニコサックト和平ス
是ヨリ初勿羅尼亜先主ラヂスラウズノ時別ニ新メタルデメド
リウスヲ出ス是嘗テ魯西亜ノ帝位ヲ除カレタル遺恨ノ尚
且敵セサルヲ以テコレヲ謀リ為スモノナリ即以為彼後裔ノ
一賤物ヲ造成シテコレヲ奉シテカサアルノ號ヲ称シ乃其名
位ヲ假テ自ラ魯西亜ヲ併呑セントナリ
此デメトリウス容貌偉ミシテ後才多智年二十五六十リ
其背ニ識文アリ嘗テサムボルグト云勿羅尼亜ノ属州ノ
小縣ノ温泉ニ浴ス時ニ人多ク此識文ヲ知レリ其地
ノ司貨ノ官九人コレト語テ其文ヲ問フニ自詳ナラスト云

又魯西亜ノ法教ノ講師ト浴ヲ共ニス又其識文ノ一ニ及
フ且其文字異体ニシテ讀難シ講師熟考シテコレヲ得メリ
即カサアルデメトリウスノ子デメトリウストニ字ナリ後勿
羅尼亜ノ都ニ来ル前主ラヂスラウコレヲ見テ真ノデメ
トリウスナリトシテ親友ノ交ヲ結ヒ魯西亜ニ近キ地ノ
ガリヒカトニ小縣ヲ與ヘテコレニ處シム
或云偽主デメトリウス実ハキリスカウトレペアトニ幻術ノ
人ナリ今出タルデメトリウスハ彼魯西亜ヲ躲去テ後セン
ミルニテ生レタル子ナリ
又云此デメトリウスハ魯西亜ノ方士コサックノ賤民ノ子

ヲ以テ センドミル ノ女郎偽デメトリウスカ妻ノ生ル所ナ
リトシテ父ノ名ヲ冒カシメ即一深不脫ノ液ヲ以テ其背
心ニ書タルモノナリ
思フニ偽主ノ子ナリト云者ハ非ナリ三偽 デメトリウスカ センドミル
ニ未ル時既ニ子有ルノ説ナシ又三偽者ノ子ナリト云説ナレ
ドモ是ハ尤非ナリ彼ハ先主ロマノウヲ即位ノ年母ト共
ニ誅セラレタリ 獨賤民ノ子ナリト云説 近キニ似メリ又ラチ
スラウカ真ナリト云ハ笑ヲ設ルモノナリ
今勿羅尼亜ノ主カレヌル 魯西亜ト和平スルニ及テ先主
ノ養ヒタル 疑 偽テメトリウスヲ密ニ サンニ送ル サンヨリ雪
除亜ノ都ヘ送ル 魯西亜前主ハ二ノノ紀三十年ノ後雪除亜ニ出ルト云モノ即是ヲ云ナリ 雪除
亜ノ主亦魯西亜ヲ憚テ刺ル天テイン ニ送ル此主コレヲ獄
ニ繫テ魯西亜ニ告ク後使聘ヲ通スルニ及テ魯西亜ニ送
ル即 モスコウ ニ於テ大刑ニ行フ 其刑布商ノ子ヲ刑スルト同シ故ニ今畧スル デメトリウ
スヲ偽ル者此紀ニ至テ盡キタリ
勿羅尼亜軍都尼亜ト相和シテ魯西亜ト外防ノ事ヲ共
ニ相援ケテ請フ魯西亜ニ之ヲ敢セス
西韃 ウクライナ ヲ侵ス ウクライナハ魯西亜ト勿羅尼亜ト両国ニ分チ属スル大地ナリ 都尔
格 四十万ノ軍ヲ以テ ウクライナヲ伐ツ十四日ニ流スシ
テ諸縣ヲ殘暴シ又勿羅尼亜ノ ヴルシ ヲ取リ又西韃

ノキリメヤ（黒海ヘサシ出タル島ナリ）ヲ伐西韃靼コレヲ防ク又都尔格モスコ
ウニ向ントス
主軍即ドルゴリヱキヲシテコレヲ遮ラシムドルゴリヱキ軍ヲ発シ
テコレト戦ヲ交ユ凡三年ニシテ未利アラス
主プリンス アレキシウイスヲ嗣子ト定メテ モスクワノ大殿ニ
主タラシメ自ラ大軍ヲ従テ出テ トルゴリヱキカ後ニ倫ン
トス
勿羅尼亜魯西亜ト共ニ都尔格ヲ征シテウクライナヲ
完フセンヿヲ魯西亜ト議ス且ウクライナノ内魯西亜ニ属セ
所ノスモレンスコトキオウトヲ勿羅尼亜ノ属州トシテ其年
貢ヲ魯西亜ニ入シヿヲ請フ主コレヲ許ス時ニ
寛文十庚戌ノ年ナリ
（已下五ヶ年ノ間都尔格并ケン西韃靼等各交戦アリ魯西
亜亦コレニ與ル且聖除亜ト魯西亜ト少ク間ヲ生スル
事ノ一ヲリトイヘ共其地名等未詳ナラサル者アルヲ以テ今
ニヲ略ス
延寶三乙卯年 主病ヒス年四十六
初室 男アレキシヲヲ生ス早世ス
長男フウトルアレキセウイス 二男イハン アレキセウイス
女 タシヤナ エウドキシア アンナ カタリナ

プリア リヒア ヲ生ム 室病ビシテ後貴族
コリロフナリスキン ノ女ヲ再室トス
三男 ペテルス デゴロフ テ 女 ナメリアヲ生ム
此主ノ如キ魯西亜ニ於テ称世ノ才徳アリ常ニ三愛
言ヲ以国人ニ示スニ カサアル博ク士民ヲ愛シ法令ニ
順フ者ヲ愛シ
親子兄弟夫婦朋友ト相和スル者ヲ愛ス又常病衰負
鰥寡孤獨ヲ救済ス皆其給用ヲ限ルナシ
胸有テ干戈ヲ動スヲ専ニセス只士卒ヲシテ戦フニ便捷
ナラシムル故ニ近隣ヲシテ尤恐レシム

嘗テ外国及亜細亜中ノ軍師兵士ヲ招テ武学校ニ置テ
吾将士ヲ交ヘテ卒伍ヲ練リ交戦ヲ習ハシム且其餘力有
時ハ法教ノ大師ヲシテ其大意ヲ訓導シテ異邦ノ人
ヲシテ吾邦ノ道ヲ暁知セシム
凡人ヲ教ルニ幼稚ヨリス故ニ成童ニシテ六芸ニ通ズル者多
シ
其子女ノ中尤才徳備ル者三人玲瓏名珠ノ聯テ相暉
ク如シ
其英雄ニシテ大量ニ付ル者ハ「カサアル」フウドルナリ
其美姿有テ智量究リナク治術ニ長シタル者ハ プリンセッセ

ソヒヤナリ

其人君タル大度有テ才藝智術ヲ備ヘ英雄ニシテ勇壮士卒ニテニ及フ者ハカサアルペテルデンゴロオテンナリ

第三十六世 長子フウドル位ヲ嗣ク年十八 明暦三丁酉年生レタリ

フウトル アレキ セウイス

即位ノ後自ラ大軍ヲ率シテ都尔格ヲ征ス即テニイペル大州ノ名ノ涯ニ陣ヲ布ク戰ヲ交テ数ヒ利アリ

勿羅尼亜都尔格ノ戰ニ乘シテ魯亜亜ノ地ヲ侵ス

魯亜亜勿羅尼亜ヲ征シテ大ニ勝ツ主軍ヲ率テ彼ノ地ニ入ル勿羅尼亜コレニ當ルヿ能ハズ遂ニ罪ヲ謝シテ和平ヲ請フ主コレヲ許ス乃勿羅尼亜約帖ヲ奉ス曰

一是ヨリ初十五年間干戈ヲ相動ス可ラザルノ約ヲナシテ既ニ三年ヲ経タリ今ヨリ後尚前約ヲ守テ必コレヲ背ク可ラズ

一ヌミレンスコ キウウノ二州先帝吾邦ノ所属ト為スヿヲ許容ス自今以後須毎年二十万ノ ルウベル金泉ノ名ヲ貢シテ以テ盛德ヲ報スヘシ

一餘両陣捕獲スル所ノ橋當ニ互ニコレヲ還スヘシ又如シ都尔格西韃等ノ役アリ今コレヲ畧ス

主西韃ト戰テ（コサック）利リメヤノ邊ニ到ル西韃大ニ困メラル彼ノ カム 西韃ノ言王トスカ如シ 遂ニ和平ノ約ヲ請フ主コレヲ許ス

又都尓格ト戰テオツトマンヤポルテニ歐羅巴ノ内都尓格ノ屬國ノ中ニ在ル一地名ナリ是敵ヲ逐テ彼地ニ入ルヤリ到ル乃敵地ニ於テ和平ノ約為ス 株ニ是其英雄タル者知ルヘシ主夙ノ軍旅ノ事ニ係テ他邦ニ勍労スル凡ソ五年未嘗寧處ス一ナシ今四方和平スルヲ以テ將士卒ノ勲労ヲ賞シ或ハ其采地ノ事ヲ詳ニス又モスコウ大小ノ家ヲ悉ク瓦屋瓦墻トナス按ニ瓦墻ハ厚ナシテ立体方長横ニ異ナリ壁磚ト大ニ異ナリ 延宝八庚申ノ年 大臣ホヤアルシモン イハノウィスポポロスキカ

姪オピミヤ ロウテフスキヲ室トス同年室病亡ス勿羅尼亜貴族ノ女マリヤ マテエオウ エウフラシニヲ再室トス

主労熱ヲ発ス主ノ妹プリンセスソヒアヲ召テ法教ヲ信シテ寺觀ニ入ル今主ノ疾病ナルヲ聞テ出テコレヲ省ス即親自コレヲ扶持シテ其疲困ヲ助ケ且近侍ノ者ヲ弔ヒ慰ミ又只一切療養ノ事ヲ指揮スルノミナラス内外諸政亦悉ク皆主ニ代テコレヲ聽ク

主病痊ヘスシテ終ニ亡ス子女ナシ次キノ弟イワン眼病且癇疾アリ政ヲ執ル可ラス末弟ペテル尚幼ナリ故其姉ソヒアコレヲ輔佐シテ位ニ即ケ国ヲ嗣シム

第三十七世

○ペテルアレキシイウイス

一千六百七十二年
主寛文十二壬子ノ年彼六月十一日ニ生ル今茲
天和元辛酉ノ年十歳ニシテ即位ス其姉ソフヤ国政ヲ輔ケ主幼ニ
シテ敏捷凡欧羅巴大洲諸国ノ言語ニ通達シタリ
貞享三丙寅ノ年都尓格魯西亞ノ辺際ヲ侵ス主年十五始テ
軍ヲ率テコレヲ征ス乃其邊疆ノ成役及其地ノ士民ノ家毎ニ
金帛ヲ与テ軍陣備ヲ賑給ス
元禄二巳巳ノ年石弊利亞ノ地チルトシキンスコイノ内チルトシキニ
城塁ヲ築キ支那トノ疆ヲ固クシテ此處ヨリ睦隣ノ使節ヲ
北京ト相通ス
同三庚午ノ年石弊利亞ノ西陳ワルカテリヤニ城塁ヲ築ク

同九丙子ノ年都尓格ノ地アソップヲ征ヘシム
同十一戊寅ノ年都尓格及ヒ西韃ト戰フ皆ユレニ勝フ西韃退ク
同十二己卯ノ年都尓格ト和平ス
同十三庚辰ノ年主命シテ両大河ヲ通セシム
其一ハウラルガト云モスコビヤ国中ヨリ東ノ方亞細亞及ヘル大長流
ノ河ナリ其末北高海ニ入ル
其二ハトント云ウラルガ河ノ西ニアリテ其末南ノ方太海ニ入ル此両
河共ニ二十四里許ノ間南北ニ平行シテ南ニ流ル、地アリ其相
距ル二十三十餘里但各支流アリテ相近クモノアリ主コレヲ審ニシテ
彼支流ノ便ナルモノヲ両處ヲ求テ各コレヲ決テ其流ヲ通セシム

其功三年ニシテ乃成ルコレニ賜ヒ邑尔西亜應帝亜支那等ノ
交易ノ貨物ヲ相通スルヿ尤便利ヲ得テ国家ヨリ士民ニモルマ
デ利益ヲ得ルヿ甚大ナリ
同十五壬午年雪際亜ト和平ス乃インゲルマンラントヲ治ム此地
曾テ魯西亜ノ属国ニテ旧名インクリヤト云百五十年前雪際
亜ニレヲ侵シ取タリ今年ニレヲ還ス「乃旧名ニ復ス」
同十六癸未年イングリヤノ海港ニ城郭ヲ築テ新都ヲ建ツベテル
スボルグト名ク其地ノ利ハ論スルヿヲ須タス土木工匠ノ美麗ヲ
盡セルモノ凡遠近ノ諸国ニレニ双フモノナシ舊都モスクワトノ相隔
ルヿ直径凡百八十里許其間ノ曲路ヲ開テニレヲ直シ一條ノ

旧都モスクワ自八千三百二十五年日本正中二年所元泰定三年所築也

大道ヲナシ里亭驛舍等ノ如キ其往還ノ便宜ニ設ルモノニモ至テ
モ尤能ク備レリ
今時四方静謐国家太平ナルヲ以テ都鄙ノ庶民主ヲ尊敬シテ
「ハアデルテス ハアデルランフ」ト称ス
此語魯西亜言ニアラス即和蘭ノ譯語ナリ
「ハアデル」ハ父ヲ云ナリ「デス」ハ之字ノ義ナリ「アデルランフ」ハ人人ノ
生国ヲ云ナリ即生國之父ト云義ニシテ民之父母トモ言ナリ
正德五乙未年 寺觀ヲ興立シ法官ノ位階ヲ整ヘ雅頌聲
律管絃舞樂等ヲ修正シ祭祀ノ事儀ヲ盛ニス
同年 新都ニ大學校ヲ建テ博士ヲ召テ諸家ノ

書籍ヲ講セシム

享保元丙申ノ年　主冊行シテ西ノ方大泥亜　和蘭　漢
利亜　布魯伊鮮　拂郎察等ノ諸国ヲ巡覧ス即遊行
シテ外国ニ在ル凡十六ケ月ニシテ還ル
此後又和蘭　拂郎察　入尔馬泥亜　勿羅泥亜　雪
際亜ヲ巡覧ス皆彼諸国ノ政刑礼樂ヲ校シ或ハ諸術藝
奇器等ヲ審ニシ其学師工匠ヲ召ス等ノ事ナリ
同五庚子年　礼勿泥亜帰服ス　此ニ至テ近隣諸国服従セサ
レモノナシ
同年　ワルガテリヤ不幸利亜ノ西地ハ土人不庶ヲ多ク得タリ乃火浣布ヲ製

同六辛丑ノ年　北高海ノ周邊ヲ巡見シテ其里程ヲ測リ水陸ノ
分界山河ノ高深等ヲ検ヒシテ大ニ彼邊ノ地図ヲ改正ス「書図ニ
此大湖ノミナラス其周辺ノ国郡ニ在テモ錯誤スル所多シ　新図此湖南北ニ長ク
東西ニ狹シ舊図ハコレニ反セリ」
乃自図ヲ作テ其説ヲ述テ刊本トナシ諸州ノ学校ニシテ頒ツ
同七壬寅年　彼十月二十日　群臣称号ヲ奉テ曰
「パアテル　テス　パアテル　ラニヲ　ケイセル　パン　ケヘエル　エン　ペテル　テゴロオテ　ルスランド」
八親ナリ　今ハ大ノ義ニ訳ス　是語亦和蘭ノ訳語ナリ　ケイセルハ皇帝ナリ　ケヘエル
助辞ナリ　ゴロオテハ大ナリ　今ハ尊ノ義ヲ兼ル　ルスランドハ魯西亜ナリ　パンハ之字ノ義ナリ　エンハ

即云大魯西亜ノ皇帝国民之父ペテル大尊ノ義ナリ
主幼ヨリ聰明睿智ニシテ長テ寛仁大度尊ヲ民ヲ安シ国
ヲ富スヲ以テ務トス其人才藝文武ヲ兼其徳澤遐迩ニ被ル
政刑服章溝洫軍旅等皆講究討論シテ悉リ改ムレヲ新ニセリ
惟国人其恩恵ヲ感佩スル而已ナラス欧邏巴大小ノ国及亜細亜北地ノ
諸国ニ至ルマテ盡ク皆ユレニ帰服ス右ノ尊号ヲ諸州群ヘ示シ陸
国ニ告ク
「ペイベル」題セル古典アリ即教諭ノ書ナリ主其註解ヲ述シテ和蘭
ノ都下ニ雕刻セシメテ乃其價ヲ廉ニシテ賤民ヲリモ家毎ニユレヲ得
易リ其父讀テ子ニ教ヘ童蒙ヲ養テ正ニ養カレメントナリ

是ヨリ以下其年月未詳ナレモ諸書ニ散見セルモノヲ挙ク
新都ニ醫學校並ニ薬局ヲ建ツ又天文暦術ノ學校ヲ建ツ
北島海ニ入ルダイルト云川ノ源ニ金礦ノ在ル所ヲ察シテ工ニ命シテユレ
ヲ掘ラシムル乃莫大ノ金ヲ採ルヲ得テ大ニ財用ヲ足シテ安民軍旅ノ
要物トス
又此邊ニテ戦艦ヲ制造セシメテ潮中ニ泛テ水戦ノ術ヲ習練セシ
ムルヲテ都尔格西鞬等ノ東南ヲ防クノ備トナス
是魯西亜ノ新都海濱ニ在テ水戦ノ術他ニ求ムルニ及サルカ如シト雖モ其
地偏ニ北方ナルヲ以テ南征ノ戦術ニ於テハ便ナラサル者有ルニ依テ彼辺
ノ船ニ軍士ヲ収テユレニ備ルモノナルヘシ是即先王他国ノ軍師ヲ多ク

呂シテ武学校ニ入レテ兵軍士ヲシテコレニ従テ習練セシメタルト趣ヲ同フスルモノナリ

軍制大凡和蘭及漢人利亜ノ法ニ依テコレヲ修ニス

魯西亜ノ服章ハ凡勅西亜ノ服ニ似テ首ニ巾ヲ戴キ其外別套長クシテ踝ニ至ル主コレヲ変シテ老ノ漢人利亜和蘭ノ服章ト為サシム其革ル丁甚捷ナリ即モスクワノ郭門ノ外ニ彼新制ハ笠ト外套トヲ懸テ其直ガラベント呼フ銀泉二枚ニ定テ都下ニ入ントスル者ヲシテコレヲ買テ服サシム若其泉ヲ帯サル者ヲハ乃膝ヲ地ニ着テ膝ヲ立テ處ラシメ其外套地ニ至ル所ヲ限トシテ裾ヲ裳テ大剪刀ヲ以テ此ヨリ前ニ去テ而後都門ニ入ラシム

此ノ如クスル丁数日ニ及ハスシテ国中ノ服章盡ク革レリ

通河道

西洋諸国ニカナアル」ト云水路アリ是ハ船舶ノ便路ヲ得ン為ニ新ニ決リメル川ヲ云主コレヲ處々ニ設テ大ニ捷径ヲ得タリ如今ペテルスボルグ「即新都」ヨリ船ヲ発シテ東ノ方亜細亜ニ往ントスル者即ラドガニ泛ミソレヨリ乃ルコハ川ノ流レニ随テノボゴロドニ到リソレヨリカナアルニ由リテウェルニ到リメレヨリウラルガニ随テニスネゴロドニ到リソレヨリカナアルニ由リテアストラカンニ到ル即北高海ニ泛ムナリ

此船路ヲ以テ諸遠東ノ外国ニ通シ又彼諸国ノ商船モ魯西亜ノ三都ニ會スルヿヲ得ルナリ

又ペテルスボルゲヨリ歐羅巴ノ南西ヲ廻ラントスル者ハドン河ヨリシテ
アゾフニ到リ大海ニ沒シ公思旦西諾百尔ニ到リソレヨリムルク和
ニ向テ地中海ニ沒シ皂勒西亞 壹大里亞 入尔馬泥
亞 佛郎察ノ海ヲ經テ ギブラルテルノ海峽ヨリ出テ 波尔都
佛尔 以西波泥亞 佛郎察ノ海ヲ經テ漢久利亞ノ海
峽ヲ過テ和蘭ニ到リテ諾瓜児土海ニ浮ヒソンドノ海峽ヲ
過テ ニ沒シ原處ペテルスボルグニ還ルナリ此一船
路凡四千四百餘里ヲ經ルナリ是皆ペテルデゴロオテノ河道ヲ通
シタル成功ニ藉ルナリ乃今ニ至ルニテ一大奇功ト称スルナリ
古来石弊利亞ノ大地山川多クシテ崎嶇陰陽ナル故ニ行路

甚難シ其支那ニ往ク者ノ如キ凡六年ヲ歴ルニアラサレハ到ルヿ能ハサリ
キ然ルニ此主彼土人ヲシテ其峻陰ヲ開カシメテ順路ヲナシ加之舟行
ノ便ニ資テ尤捷徑ヲ得タリ乃即今 モスクヨリ支那北京ニ到ル
者僅ニ四ヶ月ヲ以テスルカ期ヲ考スルヿヲ得タリ
此餘ノ事業甚多シ今譯述ニ遑アラス他日ヲ候テコレヲ訳スベシ
享保九甲辰ノ年彼正月二十八日ニ病亡ス
時ニ年五十二六ヶ月ナリ 在位四十三年
其子幼ナルヲ以テ其室カタリナコレヲ嗣ク是遺訓ニ依テナリ
其葬儀厳重莊嚴ナリ凡魯西亞ノ前代未曾コレヲ見聞スル者
アラス

〔其費ハ銀ヲ以テ幕府察ノ銀匠ニ命シテコレヲ造ラシム最荘厳ヲ
極ム其重サ凡六万銭アリ
碑ヲ建テ其高徳ヲ傳フ
〔碑銘ヲ譯訳セント欲スルニ素ヨリ文雅ヲ習ハス但其譯言ニ随テ大略
ヲ録シ而已〕
維時千六百七十二年六月十一日皇天吾君ヲ降ス嗟君生テ
聖徳有リ長テ国事ヲ勤ム大業既成テ忽チシテ天ニ升レリ
（寛文十二年壬子生ル寛慶時）
維時千七百二十五年正月廿八日ナリ嗟君吾国民ヲ棄々リ而
（享保九年甲辰二月廿五日）
已昌ノ敢テ棄ンヤ其国ヲ治スルニ七年アリ其志ヲ成スニ嗣子アリ
嗟君往昔ノペテル〔法教ノ先哲ノ名〕ノ法諦ヲ奉シ神道ヲ以テ帝
業ヲ継キ其法冠ヲ正セリ嗟君太古ヤヘツトノ舊邦ニ處リ聖
功ヲ以テ典則ヲ新ニシ其国光ヲ明ニセリ仁ヲ以テ不仁ヲ教テ仁有ラ
シメ信ヲ以テ不誠ヲ化シテ誠有ラシム
此餘礼法ヲ修メ軍功ヲ立テ術藝ヲ精シ山川ヲ開ク等ノ事ヲ誌ス本
紀既ニコレヲ詳ニスルヲ以テ今コレヲ畧ス末ニ河海ヲ以テ悉ク風氣ヲ
第三十八世嗣 以テ歎息トスル等ノ哀傷ノ語アリ

○カタリナアレキシイウナ

主先主ノ時ヨリ内政ヲ助ルノミナラス外防ニ在テモ数々輔ヲナス
故ニ相將ヨリ軍卒ニ至ルマテモ其厚徳ニ服ス
先主世ヲ棄ルノ際此主コレヲ嗣ノ子ヲ都下ノ軍府ニ告ル乃軍

士兵卒悲ノ悲哭帝泣シテコレニ應對スルヿ能ハサルヿ数刻ニシテ皆
涙ヲ拂テ同音ニ謂テ曰吾国ハ他国ノ文既ニ亡ビタルモ而モ吾国ノ冊
尚存セリト其恩恵ニ懐キ從フヿ此ノ如シ
先主近隣ノ国ヲ巡ル時或ハコレニ從ヒ又ハ別ニ自ラ他邦ヲ巡覧
セルヿアリ
主性格物致知ノ学ヲ好ム
享保十七巳ノ年　新都ニ格致学校ヲ建ツ天文地理暦筭ノ
諸博士ヲ集メ諸測器ヲ置テ窮理ノ術ヲ講習討論セシム乃
貴族ノ少年ヲシテコレヲ学ハシム
同十二丁未ノ年　病亡年四十一

第三九世

十七條ノ遺訓アリ　子コレヲ嗣

○ペテル デ テウエエデ

即位年十六ナリ
享保十五庚戌年　主疱瘡ヲ病テ亡ス

第四十世

從父姉コレヲ嗣ク　曾テ島尔蘭土ノ公ニ嫁メ寡トナリ後国ヲ治メタリシヲ迎立

○アンナ イバンノウナ

父ハ イバンアレキシイウイス ペテル デ ゴオデ 異母兄ナリ即位ノ後
諸侯国ノ州郡ヘ命令ヲ下スモノ凡十九條アリ
是ヨリ初享保十四巳酉年 ペテルスボルグニ大学校ヲ建ルノ議アリ
今歳命シテコレヲ建テ専ラ貴族ノ年少ヲ入レテ学ハシム

享保十六年亥年 支那ヨリ使聘ヲ来ス
同年八月 都尓格ヨリ使聘来ル
同十七壬子年 是ヨリ前キ巳尓西亜ト和セス動モスレハ輙チ戦争ノ事アリ玆歳和平ス
同年 小学校ヲ建ツ
主拝下ヲ教導スル事純ラ一ヘニ ペテルデゴロオテ ノ法ニ依レリ乃貴族及世禄世業ノ者ノ幼童ヲ教旨センカ為ニ此学校ヲ建ツ
主殊ニ異邦ヨリ召ス所ノ軍士ノ子ヲ憐テ共ニ此学ニ入ラシム即其徒ヲ分テ四部トナシ 其学ヲ分テ十五科トス今学輩ノ
・教差ニ分ツ所ノ部科ヲ記ス即左ニ図スル所ノ如シ

科	部	人数
軍学	魯西亜	二百四十七人
	エストランド 居国	四十一人
	レイフランド 同上	三十三人
	異邦	十四人
兵術	魯西亜	四十七人
	エストランド	六人
	レイフランド	二人
	異邦	五人
音楽	魯西亜	三十五人
	エストランド	六人
	レイフランド	九人
	異邦	四人
度量築城	魯西亜	三十四人
	エストランド レイフランド	三人
	異邦	一人
馬術	魯西亜	十九人
	エストランド	五人
	レイフランド	四人
	異邦	二人
舞楽	魯西亜	百〇八人
	エストランド	十七人
	レイフランド	二十二人
	異邦	十三人
文字識號	魯西亜	三十三人
	エストランド	六人
	レイフランド	五人
	異邦	三人
天文算術	魯西亜	二百四十八人
	エストランド	四十一人
	レイフランド	二十三人
	異邦	十四人

一千七百三十六年元文元年ニ亂産丸小糧都児格ト戰テ大ニ之ヲ破リ亜蘇夫ノ城地及吉里撫小糧部ノ半都ヲ奪フ次テ又都児格ノ兵ヲ破テ阿孤沙哥烏京勃端等ノ諸州ヲ取リ遂ニ走リ吉里撫ノ地ヲ去セ尋テ英尓太太亜国ヲ降シ其歳大ニ震フ一千七百三十八年元文三再和睦セリ

地理		紀文		羅典		馬尼亜	
魯西亜	十九人	魯西亜	二十九人	魯西亜	十七人	魯西亜	百九十一人
エストランド	十二人	エストランド	十二人	エストランド	十三人	エストランド	十四人
レイフランド	十四人	レイフランド	二十一人	レイフランド	八人	レイフランド	六人
異邦	二人	異邦	九人	異邦	二人	異邦	七人

刑律		言語		言語		言語	
魯西亜	十三人	魯西亜	十六人	魯西亜	四十八人		
エストランド	四人	エストランド	二十一人	エストランド	十六人		
レイフランド	十五人	レイフランド	二十三人	レイフランド	二十三人		
異邦	四人	異邦	十四人	異邦	十四人		

学校中別ニ館ヲ設ルモノ八處以テ学師学童ノ寢食養病ニ便ナラシム且其食服諸雜用ニ至ルマテ悉クコレヲ給シテ以テ勤学熟習ニ在テ些モ闕ク所ナカラシム

元文二丁巳年　諸臣會議シテ謂今主ノ廣德ニ頼テ近隣悉帰服シテ縱横宏達通セサル處ナシ実ニ宇内ノ太平ノ基ヲ開クヒ国ニ因テ尚クハアルカンゲルヨリ海船ヲ発シ北亜墨利加ノ地方ヨリ日本及支那ニ至ルマテ遠ク巡察シテ諸外国ノ方物ヲ交易シテ以テ萬民ヲシテ太平ノ化ヲ被ラシメンコレヲ今ニ今此時ニ方リト乃主コレヲ可ナリトシテ遂ニ海船ノ正司ベルヒク副司ベルグ（是人和蘭ノカピタンヨリ出ルナリ）二命シテ大船ヲ発セシム是ヨリ初都下ノ

大商国主ノ許容ヲ蒙リテ「アンガンケル」ヨリ商船ヲ発シテ既ニ
東方ニ到ル者アリ彼レ日本ノ近邊ニ在テ其友人ナル海船司ヘ贈
ラル告文アリ即茲ニ附ス
云一日大韃靼（即北韃ノ東偵オニウヘシ）ヨリ出帆シテ東砂葛ノ南ニアル
「クリル」ト云島ニ到ル此ニ魯西亜ノ戍舘アリ吾船中人ヲ少ク有
ルニ因テ彼舘ニ請テ其土人若干ヲ借テ其ヨリ南ニ行ク海中ハ
島多シ日本ニ属シタルモ有ルヨシナリ船ヲ巡ラシテコレヲ計リミルニ
凡三十四島アリ乃一島ニ近キテ砲ヲ下シ茲ニ上ラントス島人
種々ノ器械ヲ以テコレヲ防リ是ニ於テ吾クリルノ人ヲ以テ此虜来
ルノ仔細ヲ通セシム島人其証ヲ見ンコトヲ求ム乃吾コレヲ明ニ
示ス彼仍其事ヲ審ニシテ後却テ初ノ辛尓ナルヲ謝シタリ吾更ニ
行船ノ備ヲ設ケテ茲ヲ去リ又別ノ一島ニ到ル其島人甚
好意イリテ吾徒ヲ島ニ上ラシム此日大韃靼ヲ発テヨリ十六日ニ
當レリ此島沃土ニシテ諸菓木美ナル丁他ニ異ナリ吾彼果
實及ビ其餘ノ産物ヲモ多ク採テ船中ニ收メ置ケリ
右八日記中ヨリ抜萃スル所ニシテ即吾目撃シタル實跡且其
産物ヲモ持帰リテ以テ完理学ノ一端ニ供ントス此餘交易
ノ一事ハコレヲ畧ス尚此地ヨリ日本支那ニ到リテ將ニ吾魯
西亜交易ノ事ヲ図ラントスル而已
此記事魯西亜ノ大商ノ輩須ク心ヲ用テコレヲ讀ムベシ即今

舶司スパッレベルグ等日本支那ヘ通路ノ海洋審シテ遠東諸外
国ノ商舶吾魯西亞ノモスクワペテルホルグ インカンゲルノニ都會ニ
聚リ来ンコトヲ欲ス先主既ニ数百万財ヲ散シテ四方ノ民悉リ
聚リ乃亞細亞北地ノ東邊ニ至ルマテ皆吾城壘ヲ建置スルニ
及ヘリ況ヤ此通商ノ事ニ於テハ之トコロニシテヲ得ヘキカ如シ然リト
イヘモ但宜時ノ至ルヲ期ヘシ
按スルニ此一章ハ即紀者ノ語ナリ然ルニ ベルヒリ スパッレベルグノ海舶
此後何如トニテ蒲中ニ記スル所ナシ東砂葛ノ記ニ寛保宝暦中魯
西亞ノ人彼地ニ来ルモノイリ皆此辺ヲ巡見セシノミニテ南方ヘ来
ルヿヲ記セモノ未コレヲ見ス

同四巳未ノ年　西韃アルフヲ侵サントス城主コレヲ防リ大ニ
水軍ヲ発シテコレニ勝フ後遂ニ和平ス
魯西亞ノ人素水戦ニ拙シペテルデゴロオテ嘗テ北高海ニテ
軍士ヲシテ水戦ヲ習練セシム此主即位ノ後軍士ヲ勵ミシテ仍
リニコレヲ習熟セシメテ遂ニ水陸共ニ一ノ如クナラシム今此勝利
ヲ得ルヿ実ニ主ノ成功ニ藉ルモノナリ
同年　雪際亞ト使ヲ相通シテ互ニ盟約シ各其疆界ヲ堅固
ニス
又勿邏泥亞　都尔格　邏馬　西韃　佛郎察　漢人
利亞等ノ諸国皆使聘ヲ来ス

此女主丈夫ノ資アリテ能英雄ヲ御牧ス故四方ノ諸国悉
恐畏服シテ敢テ其彊ヲ侵スヿナリ終ニ干戈ヲ動スヿヲ止テ
近隣和睦シ礼節盛ナルニ至ル
此餘功業多シト雖モ諸隣国交際往還ノ事多ク雑リ記スヲ
以テ今コレヲ採録スルニ堪アラス須進テ之レヲ詳ニス
元文五庚申ノ年　主病ヒス年四十六八ヶ月二十日
治世十年八ヶ月ナリ其嗣コレヲ嗣ク

第四十一世　女主
○イハンデデルデ

主年十七即位ス
同年　雪際亜叛テ彊ヲ侵ス

第四十二世　女主
○エリサベト・ペトロウナ

同年　主病ヒス　子ナシ　ペテルデゴロオテノ女コレヲ嗣ク
寛保元辛酉ノ年　即位ス
東砂暮ヘ法教ノ師ヲ差シテ尼勒西亜ノ教ヲ弘メシム其土
人悉クコレニ帰依スコレヨリシテ後彼ノ国民礼節信義アルヿヲ
知レリ
同二壬戌ノ年　軍ヲ出シテ雪際亜ヲ征ス
同三癸亥ノ年　雪際亜永ク彊ヲ侵ス可ラスト云盟状ヲ奉シ
テ数々和ヲ請フ然ニコレヲ容ルス
魯西亜本紀是年ヲ以テ畢トス

千七百四十二年乾隆七ヘトルヘラトロウイツヲ立テ太子トス尋テ千七百四十五年延享二為ニ入尔瑪沱亜ノ歳洗児多国使ノ女ウタリナヤレキシイヘナヲ迎テ妃トス

按スルニ原書ハ此翼年吾延享元甲子ノ年彼二月廿九日和蘭
七州ノ一ウトレキトニテ即刻ノ本ナリ
今他書ニ出ル所ヲ按スルニ則此主ニ嗣クモノアリ左ニコレヲ
記ス

宝暦十二壬午ノ年　主病亡ス　子ナシ

第四十三世
○ペテル デ デルデ
其甥コレヲ嗣ク

同十三癸未ノ年　主病亡ス　子ナシ

第四十四世后妃
○カタリナ デ テウエエデ
其室コレヲ嗣ク

按スルニ明和五戊子ノ年ノ書ニ是ノ主ノ名ヲ載ル者アリ
今茲寛政癸丑ノ歳彼邦女帝コレヲ治ムト雖ドモ蓋此主ナル
ベシ

文化壬申冬十有一月嬀泉居門下生井後某等謄寫卷
末十五頁手寫念七日竣功侗菴支離子識

校正畢

乙亥五月八日讀一過頗有所刪抹正　蠖庵子識